



心の歌を奏で て

理想の国
①

芳田尚哉

「じっとしてないとダメだよ」

「……もう大丈夫だって」

じいさんにボコボコにされた時の方が、起き上がれないくらいだったからな。あれで鍛えられてるのかもな。

「ダメだったらダメなの」

「……………」

頑なだな……。

まあ、こんな状態になったら、そうなるのか。

「俺なら大丈夫だから」

このまま蜘蛛(アラネーオ)に任せるわけにもいかない。

俺のプライドとか、そういうもんじゃない。本来闘うべき相手以外に、無駄な戦闘をさせるわけにはいかない。

俺が動けなくても、蜘蛛(アラネーオ)がいれば蟲(ベステート)をなんとかする事もできるだろう。だけど、蜘蛛(アラネーオ)がいなければ、俺だけじゃどうする事もできない。

ここで、蜘蛛(アラネーオ)の力を消耗させるわけにはいかないんだ。

正直言うと、俺だって頭がぐわんぐわんしていて、まともに立てるかもわからない。

それでも、俺がやらないと。

「トールちゃん、今はじっとしてなさい」

キッとキヨカが睨む。だけど、その目には涙が浮かんでいる。

「……わかったよ」

こんな風にされて、無理矢理動くなんて、俺にはできそうに――――

「ごめん」

するしかなかった。

キヨカを哀しませるのはわかっている。だけど、それでも、こうして立ち上がるしかない。

「……っ」

一瞬、膝から崩れそうになる。なんとか倒れないように踏ん張る。

「こら、トールちゃん」

「すまん」

止めようとするキヨカの手を振り払い、黒い獣に近付く。

蜘蛛(アラネーオ)は、黒い獣に糸を吐きかけている。

効果があるのかはよくわからないが、糸は黒い獣にまとわりついている。

黒い獣は、その糸を振り払おうと体を動かしているが、糸はまとわりついたままだ。

「蜘蛛(アラネーオ)、大丈夫なのか？」

「問題なし 但し 有効に非ず、

「そっか……」

確かに、効果があるというわけでもない。相手の動きを止めるべきものなのに、それができていない。相手にまとりつかせるので精一杯というわけか。

蜘蛛(アラネーオ)の攻撃でも、ここまでだというわけだ。

それなのに、俺なんかの攻撃が通用するんだろうか。

だけど、俺がするしかない。

風伯に風を纏わせ、黒い獣に近付いていく。

「さらなる風を 強大な風を放て、

さらなる風？ もっと風を纏わせろって事か？

「念じよ 陰なるものを 霧散させよ、

もっとすごい風で、この影を吹っ飛ばせて事か？

そんな事ができるのか？

だけど、確かに影に風は通じている。感触がなくても、攻撃自体は通用している。

だったら、無理というわけでもない。

「やってやるか」

こうなったら、蜘蛛(アラネーオ)が言うようにするしかない。

「キヨカ、頼む」

蜘蛛(アラネーオ)の声は、キヨカにも聞こえているはずだ。だから、無駄な説明はいらない。

「でも……」

「蜘蛛(アラネーオ)が言ってるんだぜ。だったら大丈夫だろう」

「……………」

キヨカは、じっくりと考えてるようだ。

「わかったよ。どうせ、トールちゃんは、止めても無駄なんだ。だったら、私は全力で応援する。全力で助ける。そうしたら、トールちゃんが大丈夫になるかもしれないもん」

「……助かる」

わかってきている。

俺は、キヨカの手助けがなくても、俺だけの力でなんとかするつもりだった。

キヨカも、そんな俺をわかってきている。

心配させて悪い。

なんとなく、口に出すのは恥ずかしい。

キヨカの音が響く。

俺の体を共鳴させて、風伯の風を共鳴させて、世界を共鳴させて――キヨカの音が響く。

それに応えないとな。

キヨカの音を受けて、風が大きくなっていく。

「……くっ」

その大きな力を制御するのは難しい。気を抜くと、あっという間に散ってしまう。

そうさせないように、風をひとつに纏める。

「風を放て、

その声を合図に、纏めた風を一気に放つ。

「いっけえっ！」

くっ……。重い。

刀の先に錘がついているみたいだ。

全身の力を集中させる。

腕だけじゃダメだ。全身を使うんだ。

自分に言い聞かせるようにして、手、腕、肩、腰、足……全身の力を使って、俺自身をぶつけるように放つ。

風伯を思い切り振り、巨大な風を放つ。

風は渦を巻くようにして、黒い獣に向かっていく。

これで無理なら、もうどうしようもないぞ。

俺だけの力でできるのはここまでだ。ヒナゲシさんの協力があれば、あの時のような事もできるんだろうけど、所詮一人の力なんてこんなもんなんだ。

ごうっと音を立てている風は、動きを止めていた黒い獣に命中する。

渦を巻くように回転していた風は、抉るように黒い獣を押ししていく。

じりじりと下がっていく黒い獣。

周囲の影が、風に巻き込まれて散っている。

もしかしたら、これで本体が出てくるのか……と思ったけど、それらしい様子はない。

「追撃せよ、」

「えっ？」

突然の事に、なんの事かわからなかった。

「おいおい、追撃って………わかったよ」

蜘蛛(アラネーオ)の言葉に従い、もう一度風伯を構える。

「キヨカ、頼む」

「りょーかい」

そう言うと、キヨカはすぐに演奏を始める。

「やってやるよ」

風伯に風を集める。

今のこのチャンスを逃すわけにはいかない。

黒い獣が動けていない今、巨大な風が消えていない今、まさにこの瞬間に、もう一度同じ力をぶつける。それが有効ならそうするだけだ。

ただ、もうちょっと先に言っておいて欲しかったかも。もっとも、この状況を見極めてからじゃないと判断できないんだけど。

急いで風を集める。

早く。

もっと早く。

早く集まれ。

意識してなんだろうけど、キヨカの曲もテンポが上がっている。

ナイスアシストだ。

放て、

風が集まった瞬間、蜘蛛(アラネーオ)が告げる。

「わかったよ」

最初の風を受けている黒い獣に向けて、もう一度同じくらいの風を放つ。

「いっけえっ！」

さっきと同じくらいの風が、黒い獣を襲う。

最初の風に、追加の風が当たり、その威力が増す。

黒い獣の周囲の影が、引きちぎられるように散っていく。

よし。これなら……。

さすがに、もう一回って事はないだろう。

だけど、状況次第じゃあるのか……。

一応、風伯を構えて、小さく風を集める。

風はぐいぐいと黒い獣を押し、やがて飲み込んでしまう。

蟲(ベステート) 発見せり、

えっ？

突然、蜘蛛(アラネーオ)がそんな事を言い出した。

この状況で蟲(ベステート)だと？

蟲(ベステート)がいたとなれば、俺たちはそっちに向かわないといけない。なにせ、そっちが本題だからな。

だけど、このままにしていくのも気が引ける。

「トールちゃん」

「わかってる。蜘蛛(アラネーオ)、蟲(ベステート)はどこだ」

ここからどのくらい離れているんだろう。できれば、近くだといいな。

そう思っていたら、蜘蛛(アラネーオ)は信じられない事を言った。

眼前、

「……………」

一瞬、思考が止まった。

「眼前……？ 目の前だっていうのか？」

いったいなにを言ってるんだ？

目の前に、それらしい姿はない。

目の前にいるのは、あの黒い獣だけだ。もっとも、その黒い獣は、風伯の風の中にいるんだけど。

もしかして、俺に見えない大きさなのか？

「蜘蛛(アラネーオ)、どこにいるんだ？」

眼前 風の中、

「風の……中？」

風の中には、黒い獣しかいないはずだ。もしかして、黒い獣と一緒に巻き込まれたのか？

なにせよ、俺が認識しているのは黒い獣だけだ。もしいたとしても、俺はその姿を見ていない。

しかし、蜘蛛(アラネーオ)が嘘を吐く事はない。そもそも、そんな理由がない。

だとしたら、本当にそこにいるんだろう。

「そのまま 風を 集めよ、

いったいなんだってんだよ。

よくわからないけど、とにかく蜘蛛(アラネーオ)の言葉に従う。蟲(ベステート)に関する事は、蜘蛛(アラネーオ)を信じればいい。

「わかった」

風伯に集中して、刀身を包むようなイメージをする。

「風と影が消えた時 汝 斬撃を放て、

風と影が消えた時……？」

「わかった」

とにかく、やるしかないんだよな。

風伯を風で覆い、風の刃を作る。

そして、黒い獣を飲み込んでいる風に集中する。これが消えた時、俺はそこに向かって風伯を振る。

ぎゅっと風伯を握り締める。

「今、

蜘蛛(アラネーオ)の声が聞こえた瞬間、風が一気に消えた。

それを確認する前に、蜘蛛(アラネーオ)の声が聞こえた瞬間、反射的に斬撃を放っていた。

風の斬撃は、黒い獣に命中する。

その風が、黒い獣を切り刻むようにまとわりつく。

風はやがて消えていく。

消えた風を見ると……そこには確かに蟲(ベステート)らしい姿があった。

どうなってるんだ？

あの黒い獣の姿がない。

そこにいるのは、細長い体をした蟲(ベステート)だ。その尻尾のような部分には、鋏のようなものがある。

……ん？ これって……。

そういえば、あの黒い獣にも、同じようなものがあった。

って事は、この蟲(ベステート)とあの黒い獣は同じなのか？

だけど最初、蜘蛛(アラネーオ)は蟲(ベステート)の存在を確認できていなかった。普通なら、そんな事はない。

……あの影か。

考えられるのはそれくらいだ。

あの影のようなものが、蜘蛛(アラネーオ)の感覚を鈍らせていたのか？

っていうか、あの影はなんだったんだ？

もしかして、蟲(ベステート)を操ってたのか？まあ、ほとんど動いてなかったけど。

いやいや、そんなのは考えてもわかる事じゃないし、俺が考える事じゃない。

「とにかく、これでようやく本番って事だな」

黒い獣が蟲(ベステート)だとわかれば、俺たちの役目だ。

「トールちゃん、頑張ってるね」

「おう」

改めて蟲(ベステート)を見る。

黒い影に覆われている間、あれだけ攻撃を受けていたにも関わらず、特にダメージはないらしい。むしろ、影がなくなって、自由に動けるようになった分、元気になっているように見える。

蟲(ベステート)は、その尻尾の鋏を高々と上げ、威嚇している。

「鋏に注意せよ、」

「わかってるって」

蜘蛛(アラネーオ)に言われるまでもない。こんなにわかりやすい武器だぞ、気を付けるに決まってるだろ。

.....なんてしていると、蟲(ベステート)の鋏が襲ってきた。

一気に間合いを詰められる。

目の前に、鋏が迫っている。

「うおっ！」

間一髪で避ける。

「トールちゃん、なにしてるの」

「ちょっと油断した」

本当はそんなもんじゃなかった。一瞬遅かったら、鋏の餌食だった。

気持ち悪い汗が出てくる。

「なんて速さだ」

蟲(ベステート)の動きは思ったよりも速い。

っていうか、黒い獣だった時に、ほとんど動きがなかったせいもあるんだろう。

こりゃ、集中を切らしたらやばいな。

汗を拭って、風伯を構える。

心臓がバクバクしている。もしかすると、俺は死んでたかもしれないんだぞ。

今までも、そういう場面はあったけど、今回もきついな。

「蜘蛛(アラネーオ)、サポートを頼めるか」

「善処する、」

善処ね.....。

まあ、そうだろうな。

この速さは、蜘蛛(アラネーオ)の糸も追いついていない。

さっきも、糸で絡めとろうとしていたけど、するっとかわされてしまっていた。

蜘蛛(アラネーオ)がこんなに苦戦するってのは、俺がどうにかできるのか？

いやいや、弱気になってどうするよ。

こういう時だからこそ、俺がなんとかしないとだろ。

風伯に風を集めて、風の刃を形成する。

風を飛ばしても、この蟲(ベステート)の速さには追いつけない。すぐにかわされてしまう。

こっちが狙えないなら、する事は決まってるだろ。

これは、かなり命懸けなんだけどな……。

だからこそ、キヨカには相談できない。そんな事したら、絶対に止められるからな。きっと、蜘蛛(アラネーオ)に命令してでも、俺を動けないようにするだろう。

「悪い」

とりあえず謝っておく。

俺自身も、どうなるかわからないし、成功する自信もない。

だけど、考えつく手段を実行しておかないとな。俺にできそうなのは、これくらいなんだよ。

さあ、いつでも来い。

蟲(ベステート)から目を離さない。

じいさんに鍛えられたお蔭で、動体視力はそこそこいい。

だから、蟲(ベステート)の動きはだいたい見えている。もっとも、完全じゃないんだけど。

それでも、なんとか姿や残像を追う事はできている。

さあ、来い。

蟲(ベステート)の動きに注意しながら、チャンスを待つ。

こいつを相手に、何度も通用するかわからない。そもそも、チャンスがどのくらいあるのか、それ以前に俺が立ってられるか、なにもわからない。

だから、一撃で決めるしかない。

失敗したら、キヨカが気付いて俺を止めるかもしれないしな。

じっと蟲(ベステート)を見て、その時を待つ。

蟲(ベステート)は牽制するように移動しながら、蜘蛛(アラネーオ)の糸も完璧に避けている。

こいつは、今までにないくらい厄介かも。これから先、こんなのばっかだったら……。

俺の技量が追いつかない。

そんな事よりも、今は目の前の事だ。

こいつをなんとかしないと、次はない。

さあ、来やがれ！

呼吸を整え、タイミングを待つ。

蜘蛛(アラネーオ)のサポートもあって、蟲(ベステート)の動きは制限されている。

助かるぜ、蜘蛛(アラネーオ)。

その蜘蛛(アラネーオ)が、確実に蟲(ベステート)を捕らえられるように、俺がサポートしてやんなきゃな。

風伯の刀身を包んでいる風が凧いだ。

しんと静まり、風がもうひとつの刀身になる。

それを少し延長させて、俺の間合いを広げる。

その時、蟲(ベステート)の動きが変わった。

蜘蛛(アラネーオ)の糸を避けているだけだったのが、こっちに向かってくる気配を見せる。

待ってました。

蜘蛛(アラネーオ)もそれに気づき、俺を護ろうとするかのように糸を吐くが、蟲(ベステート)はそれを振り切った。

「大丈夫」

蜘蛛(アラネーオ)に言うのと同時に、自分にも言い聞かせる。

大丈夫だ。

俺ならできる。

ぐっと風伯を握り締める。

もう少し。もう少しだ。

間合いを見極める。

遠くても、近すぎてもダメだ。

だけど、蟲(ベステート)の動きは速い。

どこまで対応できるか……。

それでもするんだ。

さあ、もう少し、もう少しだ。

そして――

「ここだあっ！」

風の刃を振り下ろす。

俺が狙うのはカウンター。

こっちが近付けないなら、向こうから来るのを待てばいい。

相手が攻撃をしてくる時、それが俺のチャンスだ。

鋏に注意して、そこに風の刃をぶち込む。

「なっ！」

しかし、蟲(ベステート)は俺の行動を読んでいたかのように、鋏の軌道を変える。

風の刃は、見事に空振りに。

しかし、鋏も俺の横に刺さった。

おいおい、マジかよ……。

驚きのあまり、次の行動に移れない。

こんな時は、すぐに次の手を打たないと……。攻撃を休んでしまうと……。

「うわっ！」

そう、こんな事になってしまう。

蟲(ベステート)は地面に刺さった鋏.....というか尻尾を振り、俺は吹っ飛ばされてしまう。
俺は見事に宙を舞い、地面に叩きつけられる。

「がはっ」

あまりの衝撃に、風伯を取り落としてしまう。

「くっ.....」

すぐに立たないと.....。

そう思っても、体が動かない。

両手を地面に突き、なんとか立ち上がろうとするけど、やっぱり立ち上がれない。

くそ.....。

「トールちゃん」

キヨカの声に視線を動かすと、蟲(ベステート)が迫っていた。

「っ.....」

「伏せよ、

蜘蛛(アラネーオ)の声に反射的に反応して、伏せるというよりはそのまま地面に突っ伏す。

「アーちゃん、やったあ」

ん？ どうなったんだ？

とにかく、俺は生きているらしい。

だけど、力が入らない。

もう起き上がる力もなく、そのまま地面に伏している。

なので、どうなったのかわからない。

カサカサと蜘蛛(アラネーオ)が動いている音がかろうじて聞こえる。だけど、それ以外はなにもわからない。

しかし、俺って情けないよな。

完璧だったはずのチャンスだったのに。

俺はそのチャンスを活かしきれなかった。

その結果がこれだ。

無惨にも、地面に倒れている。

「無事か、

「ああ、なんとか」

どうやら蜘蛛(アラネーオ)がすぐ傍にいるらしい。なんとなく、そんな気がする。

だけど、顔を上げる力もない。

このまま倒れていると、急に体が浮かび上がった。

「.....おっ？」

なにが起きたのかわからないけど、動く事ができないので、どうする事もできない。

かろうじて見えた景色から、どうやら俺は蜘蛛(アラネーオ)の糸に吊り上げられ、今は蜘蛛(アラネーオ)の背中にいるって事がわかった。

「なあ、蟲(ベステート)はどうなったんだ？」

状況がわからないので、蜘蛛(アラネーオ)に訊くしかない。

「蟲(ベステート) 撤退せり、

静かな声だった。

「……………そっか」

蟲(ベステート)は逃げたって事か。

だったら、次こそは……。

だけど、俺が動けるようになってるかどうか……。

俺は蜘蛛(アラネーオ)に乗せられ、気が付けば宿に戻っていた。

「トールちゃん、無茶しすぎだよ」

目が覚めた俺への第一声がこれだった。

「どうしてあんな危ない事するの。もしかしたら、死んじゃってたかもしれないんだぞ」
わかってるよ……。

そんなの、俺が一番わかってるんだよ。

だけど、そんな事を言える状況じゃない。

なにせ俺の目の前には、涙を流して目を赤く腫らしたキヨカの顔がある。

こんな表情を前に、なにが言えるってんだよ。

こんな表情をさせてしまった事が悔しい。おれが、そうさせたんだよな……。

「でも、無事でよかったよ」

ピシッとデコピンをされる。

ああ、痛い。

だけど、これが生きてるって事だよな。

「……くっ」

体を起こそうとしても、思うように動かない。

関節が錆びたみたいに動かない。ギシギシと体が軋んでいるみたいだ。

「じっとしてなさい」

いつもなら、無理にでもベッドに押さえつけられそうなものだが、そもそも俺が動けないので
そうされるまでもない。

はあ、はあ……。

息をするのって、結構疲れるんだな。

思うように声が出ないどころか、息をするのも疲れる。

もしかして、肋でも折れてるのか？

自分の体なのに、どういう状況かわからない。

「とにかく休んでて」

わかったよ。

そう答える事すらできない。

頷く事もできない。

だけど、目を閉じる事で、なんとか意思を伝える。

ゆっくり休もう。

少しでも動けるようにならないとな。

それにしても……あの動き、どうするんだ？

俺はもちろん、蜘蛛(アラネーオ)も捉える事ができなかった。あの速度を超えないと、俺たちの
勝ちはない。

どうすりゃいいんだろうな。

全く対策が思い浮かばない。

どうすりゃいいのかね……。

どうせ動けないんだし、ゆっくり考えるか。

とりあえず、脳内でシミュレートしてみる。

……………ダメだ。一瞬でやられた。

一人で立ち向かうと、一瞬であの鉄の餌食に。あり得ない……。

蜘蛛(アラネーオ)のサポートがあっても……………。

うわっ、勝てる気がしない。

どうしたらいいんだろう。

なにか、対抗策を見つけないと。

そもそも、蟲(ベステート)がいつ出てくるのか。その時までには、動けるようになっているとい
いんだけど。

グッと体に力を入れようとして、

「うっ」

痛いだけだった。

ちっとも動かない。

見事に吹っ飛ばされたからな……。

あんなに吹っ飛ばされて、生きていてよかった。

ほどほどに無事だったのは幸いって事だよな。

「トールちゃん？ 大丈夫？」

俺の声がしたからだろう、キヨカが心配そうに覗き込んでくる。

大丈夫だって。

そう伝えたいけど、声が出ないんだよな……。ってというか、出すと体が痛いんだよな。

頷こうにも、動かさないってのが……。

「もう……無茶しちゃダメなんだよ。じっとしてないとダメなんだからね」

わかりました。

って、やっぱり声が出ないんだよね。

「とにかく、じっとしてる事。悶々としてきたら、私が処理してあげるからね」

……………いらねえよ。

ったく……。人が喋れないと思って、なにを言い出すんだか。つうか普通、女の子がそういう
事言わないだろ。

どこのセクハラ親父なんだよ。

まあ、キヨカなりの励ましと思っておこう。そうしておこう。そうしよう。そうしておかない
とな。

それはそれとして、最近はずっと寝てないか？

この前の世界でも、結構眠っていたわけだし、昨日だって一日眠っていた。で、今はこうして
動けない。

最近に限れば、眠ってばっかだな。本当にどうにかしないと。

まずは動けるまでに回復しないと。

ここは開き直って、ゆっくり休むとしようか。

.....蟲(ベステート)の対抗策は思い浮かばないままだけど。

いつの間にか眠っていたらしい。体を酷使しすぎて、疲れてたもんな。

「おはよう、トールちゃん」

「ああ、おはよう」

.....って、ん？ 声が出た。

どうやら、喋れるくらいには回復したらしい。

「トールちゃん、やっと喋れるようになったんだ」

「ああ」

体の痛みも和らいでいる。少しは動くようになった。

「でも、さすがに歩けないよね」

試しに右腕を動かしてみる。

「.....んん。.....ちょっと無理かも」

動かなくはないけど、動かす度にやっぱり痛い。

今度は足を動かそうとすると、強烈な筋肉痛をさらに痛くした感じだ。

「っ.....」

マジで痛い。

「だから、無理しちゃダメって言ってるでしょ」

「うげっ！」

キヨカは思い切り俺の足を叩く。

「キ、キヨカ.....」

これはマジで痛い。

傷口を抉られてる気分だ。まあ、実際に傷口を抉られた事なんてないんだけど。

「じゃあ、トールちゃんは動けないっぽいから、私だけ行ってくるね」

「.....ん？ 行ってくるって？」

いったい、どこへ行こうってんだ？

「決まってるでしょ。ご飯だよ。今日も屋台でご飯だよ」

少しだけ歌のように節をつけながら楽しそうだな。ああ、楽しいか。そうだよな。屋台を満喫するってのは、本当に楽しいよ。

「というわけで、動けないトールちゃんはお留守番ね」

「おい.....俺は.....」

「大丈夫だよ。ちゃんとお土産は買ってきてあげるよ。心配しなくていいからね」

「あ、ああ.....」

まあ、それならいいか。

あの雰囲気じゃなくても、あそこの美味しい料理が食べれるなら……。どうせ動けないし。晩御飯抜きよりは、格段にいい。

「そういうわけだから、ゆっくり休んでね～」

楽しそうに手をひらひらさせて部屋を出ていく。

「相変わらず、すごい人だったよ」

帰ってきたキヨカは、焼き鳥っぽいものや、焼きそばっぽいものを渡してくれた。

もちろん、どちらもトマトベースのソースがかかっている。

うん、これはこれでいけそう。

「でもさ、屋間にあんな騒ぎがあったのに、今日も屋台は営業してるんだな」

今更だけど、あんな騒ぎがあって、みんなが逃げまどっていたのに、屋台はきちんと営業している。

なにもなかったみたいじゃないか。

「そういえばそうだね。みんな、普通っぽかったけどな……」

「そうなんだ」

やっぱり不思議だ。

切り替えが早いのか？

「もしかして、こういう事って、しょっちゅうあったりするのか？」

こういう状況に慣れているなら、それもわかる。

「そうじゃないみたいだよ。キッキさんは直接見てないみたいなんだけど、ああいうのは初めてだって」

「初めてだったわりに、日常に戻るのが早いな」

「でも、今は大丈夫だし」

「そうだけどさ。いつ現れるかわからないだろ」

「そうだよね……。まあ、その辺は、私じゃわからないよ」

「お前だって、屋台を堪能してたんだろ」

「そうだけど、やっぱり私とこの国の人たちじゃ、情報量が違いすぎるもん」

「まあな」

俺たちは、あの黒い獣がなんだったのか知っている。少なくとも、この国の人たちよりは。だからこそ、どういう風に対抗しようかを考える事ができる。

しかし、この国の人たちは違う。あれがなんだったのか、わかる人はいないだろう。

正体がわからないものに怯え続けたいいけない——はずだ。だけど、そうじゃない。

この国の人たちは、なにもなかったみたいに、日常を取り戻している。

不安はないんだろうか。

「でも、キッキさんは心配そうだったよ」

「それが普通だろうけどな」

正体がわからないものなんだから、どう対処すればいいかわからないはずだし、予測する事もできないだろう。

でも、それがよかったのか？

パニックにならず、こうした日常が繰り広げられている。それが不思議だ。

わからないものは、放置するか、なかった事にするって事か？

どちらにせよ、この国が決めた方針だろうから、俺たちがどうこうできるものじゃない。

俺たちは、俺たちがすべき事をするだけだ。それでいいと思う。

もっとも、それをするためには、俺は今の状態じゃダメなんだけど。

動けるようにならないとな……。

「キッキさんは、他になににか言ってなかったのか？」

「他に？ そうだな……」

キヨカは口に手を当てて考える。

「そうそう、自警団の出番だとか言ってた気がする」

「自警団ね……」

自衛の手段はあるわけか。その規模がどの程度のものかわからないけど、期待できそうにないだろうな。相手は常識外の存在だ。それでも、助けになってくれるとありがたいんだけどな……。

邪魔になるようなら……ってのは、俺の思い上がりだろうか。

「昔は、近くの国が攻めてきたりした事があったんだって。今はもうないみたいだけど、その名残で、自警団はあるみたいだよ」

「なるほどな……」

自然の要塞のような場所だけだな、ここ。

あの大きな門は、外部からの攻撃を防げただろうな。もっとも、そういう事があったから造られたものだろうけど。

そういう歴史が、どのくらい前のものかわからないけど、少なくとも今は形骸化してるんだろうな。

「あまり期待できそうにないよな」

「そうだね。私もそう思うよ。だから、トールちゃんが頑張らないとなんだよ」

「……はい」

ですよねえ。

「そうだ。その事で、ちょっと蜘蛛(アラネーオ)と相談したい事があるんだよ」

「アーちゃんと？ なにするの？」

「それを、これから相談するんだよ」

「アーちゃん、トールちゃんがこんな事言ってるけど……」

キヨカが蜘蛛(アラネーオ)に確認する。

「いって。召還した方がいい？」

「いや、声が届けばそれでいい」

「じゃあ、アーちゃんそういう事で」

了承した、

「よし、頼むぜ。とりあえず、俺が考えた作戦なんだが――」

俺は、考えついた作戦を蜘蛛(アラネーオ)に伝える。キヨカも、黙って聞いていてくれる。

「――というわけなんだけど……どう思う？」

話してみて不安になる。あくまでも理屈だけで、実際の効果は不明だ。

机上の空論だと突っぱねられても不思議じゃない。

「う～ん……」

キヨカは、腕を組んで考え込む。

「やっぱ、理想論かな」

なんとなく、そういう姿を見ていると弱気になってくる。

「ダメだったらそう言ってくれ。他にもなにか考えてみる」

「ううん、別にいいと思うよ。反論するにも、代案はないわけだし、私もそれなら大丈夫かもって思ったもん」

「そっか……」

それを聞いて安心する。

「次はその作戦でいいと思うよ。アーちゃんはどう？」

可能 協力可、

「だってさ」

「よかった……」

それを聞いた瞬間、ドッと汗が出てきた。

「それよりも、もし成功したら、やっぱりここを出ていくわけでしょ」

「そりゃそうだ」

蟲(ベステート)を封印するのが俺たちの目的だ。それが済めば、次の世界に行かないといけない。当たり前だろ。

「だよね……」

キヨカはしきりに頷く。

「どうしたんだよ。それになにか問題でもあるのか？」

「うん、あるよ」

おいおい、問題ありなのかよ。

「どういう事だ？」

もし問題があるなら、俺も知っておかないといけないだろう。

「屋台だよ」

「屋台？」

予想外の言葉に、思わず訊き返してしまう。

「屋台って……。屋台のなにが問題なんだよ」

「大問題じゃない。だって、まだ屋台を全制覇してないんだよ。ノットコンプリートだよ」

両手を大きく広げて、派手なアクションとともに力説しやがる。

「お前な……」

呆れて言葉が出ない。

「あのなあ、蟲(ベステート)と屋台とどっちが大事なんだよ」

「トールちゃん、その質問はNGだよ」

「はあ？」

「仕事と私どっちが大事なの——それと同じだよ」

「……………」

本当になにも言えなかった。

こいつ、なにを考えてやがるんだ。

確かに、それは究極の選択のひとつなのかもしれないけど、それとこれを同列で語るのか。キヨカにとって、そんなに重要な問題なのか。

「トールちゃん、どうなの？」

「どうと言われてもな……」

それはやっぱり、使命とキヨカのどっちが大切かって事だよな。

使命かキヨカか……。

まあ、順当に考えれば使命だろうな。それに勝る優先事項はない。

「そりゃ……」

使命だろ、と言おうとして、キヨカの鋭い視線が突き刺さってきた。

「うっ……」

思わず言葉を飲み込む。

「仕事……とか即答しないよね。まだそれだったら、マシなのかな。両方同じくらい大事だ……
なんてぬかしたら、最低野郎の烙印だよ」

さすがにそれは考えてなかったが、使命（仕事）だと言うのも難しいぞ。

恋人……ではないものの、キヨカ以外の選択肢がなくなってきている。

「あのな、そういう問題じゃないだろ。それに、そんな話はしてなかったはずだぞ」

「そういう話だよ。屋台のコンプリートはインポートなミッションなんだよ」

「……………マジで？」

「マジだよ。大マジなんだよ」

ぐっと見つめてくる。

その視線を前に、なにも言えなくなってしまう。なんて目力なんだよ。

「とにかく、作戦を実行するためにも、俺はゆっくり休んで、動けるようになってたいんだ。だから、休ませてもらう」

俺は逃げるように——いや、実際に逃げるんだ——ベッドに潜り込んだ。

「ヘタレだね……」

キヨカのそんな言葉が聞こえてきたが、聞こえなかった事にしておこう。

心にはグサッと刺さるものがあったが、いまさらってもんだ。

そうだよ。いまさらなんだよ。くすん。

キッキさんの案内で外に出た時だった。

「うわあっ！」

「逃げろっ！」

そんな声が飛び込んできた。

「どうしたんですか」

キッキさんが道行く人に訊こうとするが、誰もが逃げるのに必死で、その声は届いていない。

「どうしたんでしょう？」

キッキさんは不安そうだが、俺たちにはなんとなく想像できていた。

「トールちゃん」

「ああ」

ぎゅっと風伯を握り締める。

「行くよ」

「おう」

俺たちは、人の流れに逆らって走る。

「お二人とも、どちらに……。待って下さい」

背後からキッキさんの声が聞こえるが、待つつもりはなかった。

「キッキさん、来ちゃってるよ」

「それは危険だよな」

「キッキさん、私たちは大丈夫ですから、キッキさんは逃げて下さい」

しかし、キヨカの声は、人混みに掻き消えてしまう。

どうしたものか。

このままだと、キッキさんまで危険にさらしてしまう。

かといって、キッキさんに説明している余裕はない。

キヨカにそれを頼むにも、蜘蛛(アラネーオ)の協力が不可欠なので、それはできない。

どうするんだ？

走りながら考えるしかない。

「トールちゃん、どうしよう？」

「そうだな……ん？」

その時、あるものを感じた。

「キヨカ、ちょっとだけ寄り道するぞ」

「えっ？」

人の流れから、少し外れる。

「トールちゃん？」

少し道を外れるだけで、人が少なくなる。それでも、走りにくいくらいに、人が向かってくる

「どうしたの？」

「俺たちが無理なら、他の人に頼むしかないだろ」

「どういう事？」

「こういう事だよ。ゴーウォンさん」

右手の方に向かって叫ぶ。

「あっ」

それでキヨカも気付いた。

「どうして、おわかりに？」

そこにはゴーウォンさんがいた。俺たちに併走している。

「どうしてってというか、最初からずっといましたよね？」

「……………」

ゴーウォンさんは言葉を呑む。

「トールちゃん？」

説明ってか？

説明もなにも、たいした事はないんだけどな。

「ゴーウォンさんは、ずっと俺たちの傍にいたんだよ」

「私たちの傍に？」

「言い方は悪いけど、監視役ってところだろうな。キッキさんは、表向きは案内役だ。しかし、四六時中俺たちと一緒にいるわけじゃない。その間も、監視するのがゴーウォンさんだったって事だろうな」

「監視って……………」

キヨカは少なからずショックを受けているようだ。そりゃ、監視されてたなんて聞かされたら、ショックも受けるだろうよ。

「トールちゃんは、ずっと知ってたの？」

「知ってたってというか、あまりにも自然だったから、気にしてなかっただけなんだけどな。別に疚しい事もないからな」

後ろめたい事があれば、こういうものに敏感になるかもしれない。だけど、そういう気持ちがないければ、気にするような事じゃない。

「でも、気付いてたんだよね」

「そりゃ、な。気配くらい感じるだろ。それで、誰だと思ったら、ゴーウォンさんだったんだよ。それだけだ」

「それだけって…………。私だけ知らなかったなんて、なんだか狡くない？ ちゃんと教えてよね」

「だから、別に意識する事もなかったんだってば」

「申し訳ありません。確かに監視の意味合いもありますが――」

「護衛、ですよ。俺たちの…………ってのもあるでしょうけど、キッキさんの」

「はい」

ゴーウォンさんは短く肯定した。

「どういう事なの？」

「別に難しい事じゃないだろ。旅人である俺たちの監視と、身の安全は重要だと思うぜ」

「それは、なんとなくわかるよ」

「しかし、俺たちは謎の身分だ。なんの保証もない。だからこそ、監視も必要もあったわけだけど、それと同時に、常に一緒にいて案内しているキッキさんに危険が及ばないか、それも監視しておく必要があったわけさ」

ゴーウォンさんは無言で頷く。

「つまり、ゴーウォンさんは、キッキさんのボディガードだったってわけだ」

「その通りです」

「それって……」

「キッキさんは、堂々と俺たちと一緒にいて、俺たちの行動を監視。ゴーウォンさんは、あの小屋に残ったと思わせておいて、俺たちの様子を監視していたってわけさ。もちろん、悪意があったわけじゃないのはわかるだろ。国防の観点からして、必要な事だと思うぜ」

「ご理解いただいて、恐れ入ります。しかし、こうして気付かれたのは初めてです」

「そうなんですか？ それって、今までは指摘されなかつただけじゃないんですか？」

「そうかもしれませんが、少なくともそれらしい反応はありませんでした」

そんなもんかな……。

まあ、普通の旅人が、どこまで人の気配に敏感なのかわからないけど、ある程度はゴーウォンさんも気配を消していたわけだから、気付かない人もいるんだらうな。でも、完全に消えていたわけじゃないから、俺が気付けたわけだし。

やっぱり、気付いていても、わざわざ言わなかつただけかもしれないな。本当なら、そこを指摘する事はないもんな。

だが、今回に限っては、姿を現してもらう必要があった。

「とにかく、時間がもったいない」

「そうだったね」

あまり無駄話をしているわけにはいかない。

「ゴーウォンさん、キッキさんの護衛をお願いします。できれば、ここから離れた場所に連れて行ってもらえませんか」

「……しかし、それではお二人が」

「私たちは大丈夫です。安心して下さい」

「そういうわけですから、キッキさんの安全を優先して下さい」

「しかし……謎の生物が……」

やっぱり、仕事の関係上、旅人を危険にさらすわけにはいかないんだらう。

だけど、俺たちにすれば、一緒にいられるのは足手まといになりかねない。俺たちだけの方がいい。

もっとも、もしかすると一緒にいてもらったら、手助けになるかもしれない。ただし、それには相当の技量がいるだらう。

形骸化している自衛団に、どこまでできるか不安だ。

「俺たちの目的は、そいつなんですよ」

「私たちに任せて下さい」

「……………」

ゴーウォンさんは、しばらく考えて、

「それでは、お言葉に甘えさせていただきます」

そう言うと、道を外れて、来た道に戻っていく。

「これで、キッキさんは大丈夫だろう。あとは、俺たちがどうするかだな」

「大丈夫だよ、きっと。トールちゃんが、作戦を立てたでしょ」

「まあな」

そりゃそうなんだが、なんの確証もない作戦だからな。

失敗する可能性が高い。

……いやいや、そんなんじゃダメだ。

成功する。

それ以外を考えるな。

俺たちに必要なのは、まずそれを信じる事だ。

それを胸に、俺たちはひたすら走る。

次第に人が少なくなってきた、走りやすくなってきた。

「もうすぐっぽいね」

「そうだな」

蜘蛛(アラネーオ)の情報がなくても、ビンビンと感じるものがある。

蟲(ベステート)はこの先にいる。

一度相手をしているからこそわかる感覚だ。

無意識に、風伯を握る手に力が入る。

「アーちゃん、準備はいい？」

キヨカは左手の蜘蛛(アラネーオ)に話し掛ける。

「即時可能、

「うん、ありがとう」

蜘蛛(アラネーオ)の協力は必要不可欠なわけだから、いつでもいってのはありがたい。

「トールちゃん、本当にするんだよね」

「当然だろ。それが、俺たちの使命だしな」

キヨカは、まだ迷ってるのか？

まさか、屋台の方で迷ってるんじゃないだろうな。

「私たちが蟲(ベステート)を封印したら、この世界は元に戻っちゃうんだよね」

屋台じゃなくてよかった。ちょっと安心。

「そうだな。この暗いままの世界は終わるだろうな」

「……だよ。そうしたら、やっぱり、この国の人たちは……」

「キヨカ、この国以外の人たちは、困ってるんだって事を忘れるなよ」

「わかってるよ」

キヨカが今までにない鋭い声を出す。思わず怯みそうになる。

「わかってるよ、そんなの」

.....まあ、俺だって、本気でわかってないなんて思ってないんだけどな。

「でも、やっぱり考えちゃうでしょ。それっていけないの？」

「.....」

俺にはなにも言う事ができなかった。

全ての人にとって、理想的な世界なんてものはない。

誰かが諦め、誰かが不幸になり、誰かが幸せを得る。

その割合の問題だと考える人もいるかもしれないが、それも違うと思う。

多数決なんて間違っている。

もっとも、これだって理想論だ。

それでも、気持ちとしては、目の前にいて、自分たちと親しい人を優遇したくなる。それは、しょうがない気持ちだと思う。どうしようもない。

だから、キヨカを責める事はできない。

「いや、間違っていない」

そう——間違っていないんだ。

だけど、正しいのかと問われれば、そうだとはい切れない。

そもそも、正解ってなんだよ。そんなものがあるのか？

「トールちゃんは、どうなの？」

「俺だって.....」

俺はどうしたいんだ？ 走りながらだから考えがまとまらない、なんてのは言い訳にもならない。

一瞬、自分の気持ちがわからなくなる。

確かに、この国の人たちの理想を壊したくない。

親切にしてもらったし、一緒に過ごしたので情もある。

もし、これが他の国だったとしたら、俺はその国の人たちの理想のために戦ったかもしれない

。

いや、それを考えるのは意味がない。

「すまん、よくわからない」

「.....」

俺の答えに、キヨカはなにも言わず、ただ頷いた。

普段の質問で、こんな事を言おうものなら、優柔不断だとかで、罵られてるんだらうけどな。さすがに、今回に関してはそうじゃなかったようだ。

「そりゃ、本音は、俺だってキヨカと同じだよ。この国の人たちの理想を継続させたい。だけど、やっぱり、それはできない」

「……………」

キヨカは黙って俺の話を聞いている。

「俺たちの使命ってのももちろんある。だけど、やっぱり、狂ってしまった世界を、元に戻さないといけないと思うんだ」

「……………そうだよな。あるべき状態にしないとだよな」

「………そうだな」

こんな気持ちで蟲(ベステート)に立ち向かうのは初めてだ。

いつもなら、迷う事なく、躊躇する事なく、がむしゃらにできたのに……。

「俺は、全力で蟲(ベステート)を封印しようと思う」

「……………わかった。私も迷わない。屋台が惜しいけど、大丈夫。これが終わったら、全力で食べるから」

「……………」

おいおい。

冗談だと思いたい。

だけど、これって本気だよな。

「そのためにも、全力で腹を空かさないといけないだろ」

「そうだね。頑張って準備するよ」

キヨカの本気の笑みだ。

だけど、それでいい。

「じゃあ、やるか」

角を曲がると、広い場所がある。

そこに、そいつはいた。

「アーちゃん」

キヨカは蜘蛛(アラネーオ)を召還する。

俺も風伯を抜いた。

「蜘蛛(アラネーオ)、頼むぞ」

「了承、

俺はある程度の距離をとったまま、蜘蛛(アラネーオ)だけが蟲(ベステート)に接近していく。

「キヨカ、少し離れていてくれよ」

「うん」

キヨカを巻き込む危険もあるからな。

「よし、やるぞ」

風伯を構えると、風を集めていく。

蟲(ベステート)の相手は、蜘蛛(アラネーオ)に任せる。

すまないけど、頼むぞ。

蜘蛛(アラネーオ)にエールを送る。

蜘蛛(アラネーオ)は、距離をとりつつ、蟲(ベステート)と睨み合っている。

蟲(ベステート)の最大の武器は、尻尾のような所にある鋏だろう。それさえ防げれば、大きなダメージはないだろう。

もちろん、蜘蛛(アラネーオ)もそれはわかっているので、無闇に近付こうとはしない。間合いを確認しながら、様子を窺う。

相手の動きは、思っているよりも俊敏なので、それにも注意しないとイケない。

俺は、ただひたすらに、風を集める。俺がどれだけこれを早く終わらせるかで、蜘蛛(アラネーオ)の危険性が変わってくる。

俺が早くできれば、その分、蜘蛛(アラネーオ)の負担は減る。

だからこそ、俺はこれに集中しないとイケない。

あの蟲(ベステート)の動きを止めるだけの風が必要だ。

蜘蛛(アラネーオ)は、蟲(ベステート)を牽制するように、糸を吐いている。

蟲(ベステート)はそれを難なく避けている。

普通なら、悔しがるところだろうが、それも作戦の内だ。こうなるのは、想定済み。むしろ、それを踏まえての作戦だ。

蜘蛛(アラネーオ)は、それを悟らせず——といっても、蟲(ベステート)がそういう事を考えているとも思えないが——糸を吐き続けている。

その糸は、地面のあちこちに張り巡らされていく。

いいぞ。これならできる。

風伯の風もいい感じだ。

「蜘蛛(アラネーオ)、準備オッケーだ」

承知、

俺の声と同時に、蜘蛛(アラネーオ)は距離をとるように、後方に跳んだ。

蟲(ベステート)は蜘蛛(アラネーオ)を追うように前進する。

やばい……。

このままだと、十分な距離が……。

蜘蛛(アラネーオ)の動きよりも、蟲(ベステート)の方が速い。

あっという間に距離を縮められ、すぐさま鋏で攻撃してくる。

蜘蛛(アラネーオ)は、糸を巧く利用して、なんとか避ける事ができた。

しかし、すぐさま次なる攻撃が蜘蛛(アラネーオ)を襲う。

「アーちゃん」

「止まれ」

思わずキヨカが飛び出そうとするのを制する。

ここで出てこられたら、キヨカまで危ない。

「トールちゃん」

「わかってるって。別に、蜘蛛(アラネーオ)を囷にするつもりはないって」

俺だって、そんなつもりはないんだ。

だけど、どうすればいい？

蜘蛛(アラネーオ)は、なんとか蟲(ベステート)の攻撃を避けているものの、それがいつまでも続くとは思えない。

このままだと、蟲(ベステート)の鉄をまともに受けてしまうだろう。

かといって、俺も下手に動けない。風伯で攻撃しようにも、そうすると集めた風が散ってしまう。

くっそ……。想定外の展開だ。

どうすればいいんだ？

蜘蛛(アラネーオ)と蟲(ベステート)は、ほぼゼロ距離だ。このまま攻撃はできない。

「トールちゃん、アーちゃんを戻すよ」

「……っ！」

そうか。その手があったんだ。

「キヨカ、頼む」

蜘蛛(アラネーオ)を戻せば、そこに残るのは蟲(ベステート)だけだ。

「キヨカ。俺が風で蟲(ベステート)を巻き上げたら……」

「わかってるよ」

やってやろうじゃないか。

「キヨカ」

「うん」

その合図で、キヨカは蜘蛛(アラネーオ)を左手に戻した。

「いっけえっ！」

蜘蛛(アラネーオ)がいなくなった瞬間、蟲(ベステート)はこっちへ向かってこようとする。それと同時に、風伯の風が蟲(ベステート)を巻き上げる。

渦を巻くように蟲(ベステート)を囲んだ風は、そのまま蟲(ベステート)を空中に巻き上げていく。

蟲(ベステート)は、風に翻弄されて、身動きがとれない。

「よし、キヨカ」

「アーちゃん、もう一度お願い」

キヨカはもう一度、蜘蛛(アラネーオ)を召還する。

よし、これであとは封印するだけだ。

蟲(ベステート)は、巻き上げられる風に突き上げられている。

「蜘蛛(アラネーオ)、頼むぞ」

承知、

蜘蛛(アラネーオ)は、風の上にいる蟲(ベステート)に向かって糸を吐き掛ける。

巧いな……。

蜘蛛(アラネーオ)が吐いた糸は、風伯の風に流されるのだが、蜘蛛(アラネーオ)はそれも計算に入れているらしく、確実に蟲(ベステート)に絡みついていく。

よし、このまま……。

「っ！」

「トールちゃん、風を動かして」

俺の驚きとキヨカの声が重なる。

「無茶言うなよな」

風を動かすって、言いたい事はわかるんだよ。

俺の風は、結局のところ単調だって事だろ。

それは、俺だってわかってるし、それをどうにかしたいと思ってる。

だけど……。

「くっ」

しかし、目の前の出来事に対して、俺はなにもできないでいる。

蟲(ベステート)は、俺の単調な風の動きに慣れたのか、それを足場にして、尻尾を大きく振り、蜘蛛(アラネーオ)の糸を振り払った。それに加えて、そのままの勢いで、風から脱出しやがった。

どうすりゃいいんだよ。

全身から血の気が引いた。

やっぱり、俺の作戦程度じゃダメだったって事か。それとも、俺の力不足か。主に後者だろうな。

もっと風を自在に操れるようにならないといけないってのか。それには、かなりの時間が必要になるだろうな。

「お二人とも、大丈夫ですか」

急に誰かの声が。俺たちは、同時にその方向を向く。

「「ゴーウォンさん……」」

俺たちの声が重なる。

そこには、ゴーウォンさんがいた。他にも、剣のようなものや棒のようなものを持った人たちもいる。どうやら、彼らが自警団らしい。

「逃げて下さい」

この人たちがいれば、俺たちの行動が制限される。護るべきものが多いほど、動けなくなってしまう。

「なにを仰いますか。ここは、我々の国。我々が戦わず、旅の方の力だけに頼るなど、できるはずがございません」

団長だろうか、中心にいた男が叫ぶ。

ったく……。

気持ちはありがたいんだけど、実際は邪魔なんだよな……。

「キヨカ……」

キヨカは首を振る。なんとか、追い返してもらおうとしたけど、無理そうだ。

どうすりゃいいんだ。

だけど、そんな事を考えている余裕はない。

蟲(ベステート)は俺たちの事を待ってくれるわけじゃない。

「くそっ」

とにかく、蟲(ベステート)の動きを止めるしかない。

「蜘蛛(アラネーオ)、援護してくれ」

了解、

とにかく、蜘蛛(アラネーオ)と連携をとって、蟲(ベステート)の動きを止めるしかない。

俺が考えた作戦が失敗したいじょう、とにかくなんとかするしかない。

風の刃と蜘蛛(アラネーオ)の糸。この二つでできる事をするだけだ。

蜘蛛(アラネーオ)は、その糸で蟲(ベステート)の動きを少しだけ封じてくれている。その一瞬だけ止まったところを、風の刃で攻撃する。

自然な流れで、特に打ち合わせなんかをするまでもなく、そうなった。

っていうか、それしかできる事がない。

しかし、蟲(ベステート)は俺たちの攻撃を難なくかわす。風の刃が命中しないわけでもないんだが、絶妙なタイミングで急所を外してくるので、なかなかダメージにならない。

ちなみに自警団はというと、勢いよく、勇ましい事を言いながら来たものの、現実の戦闘の前に、誰一人として動けずにいた。

むしろ、それがありがたいんだけど。

「キヨカ」

「わかってるよ」

もし自警団が危険な事をしそうになったら、とにかくキヨカに止めてもらうしかない。

そっちはキヨカに任せよう。

俺は、目の前の蟲(ベステート)に集中する。キヨカもそのつもりだろうし。

「どうするかな……」

こうして、効果のない攻撃を続けていても、こっちの体力が尽きていくだけだ。

なにか有効な攻撃ができないと……。

「うわっ」

考えに集中する事もできない。

蟲(ベステート)の鋏が迫ってくる。

なんとかかわして、風伯で反撃するものの、それを今度はこっちがかわされてしまう。

直接、打ち込むしかないのか？

極限まで集めた風をぶち込むか、風の刃で斬るか……。

どちらにせよ、かなりリスクが高い。その分、効果は期待できるだろう。

まあ、考えるだけなら簡単なんだよな。

問題は、それをどう実行するのか。

迫ってくる鋏をかわしながらじゃ、考えなんてまとまりゃしない。

作戦もなにも、あったもんじゃないな。

俺も蜘蛛(アラネーオ)も、ひたすら避けるしかできない。

つうか、こいつが速すぎる。とても速そうには見えないのにな。

「どうする……」

声に出したところで、誰かから案がもらえるわけじゃないし、考えがまとまるわけでもない。
どうするんだよ……っと。

危ない危ない。

気を抜くと、鋏と尻尾が襲ってくる。

……ちょっと待てよ。

この蟲(ベステート)は、攻撃の全てが後方なのか。

……いやいや、それがわかっても、なにもできない。

鋏は前までくるし、移動が速いから、そもそも意味がない。

こりゃもう、ひたすら避け続けるしかないな。

蟲(ベステート)の攻撃がいつまで続くかわからないから、ペース配分ができない。ほとんど全力で避けないと、あっという間に鋏の餌食だ。

俺の体力が続かないっての。

「トールちゃん、大丈夫？」

「……………無理」

強がって、大丈夫って言いたいところけど、そんな事する意味がない。嘘なんか、すぐに見破られるもんな。

「どうしたらいいんだろう……」

キヨカもなにか考えてくれているが、いい案は浮かばないようだ。

最初の作戦が失敗した時点で、代案がないんだからしょうがない。

やっぱり、作戦ってのは、いくつか考えておくべきだよな。なにもかもが、想像通りになるはずないもんな。

だけど、他にいい作戦が思いつかなかったんだよな。

避けて避けて、ひたすら避け続ける。

「我々も加勢するぞ」

ん？

なんだ？

もしかして……。

「ちょっと待って下さい」

キヨカが、自警団の人たちを止めているが、自警団の人たちは、全く耳を貸していない。

うおーっと、鬨(とき)の声をあげて、蟲(ベステート)に向かっていく。

「お、おい……」

ちょっと待ってって。

自警団の人たちは、俺たちの気持ちを無視するように、蟲(ベステート)に向かっていく。

危ない……なんて、思う余裕もなかった。

蟲(ベステート)にすれば、的が向かってきただけだ。

鋏と尻尾が、自警団の人たちを襲う。

ある人は尻尾に吹っ飛ばされ、ある人は鋏の餌食に……。

思わず目を逸らしてしまう。

「ううっ……」

あっという間だった。

惨劇としか表現できない。

惨状が広がっている。

悲惨なのは確かだが、自業自得でもある。

「うぶっ」

思わず、吐き気をもよおしてしまう。

なんで、こんな事になってるんだよ。

俺たちに任せてくれって言ったじゃないか。

それなのに……どうして……。

がくりと膝をつく。

さすがに勢いを持っていた自警団も、この有様に動きが止まる。

蟲(ベステート)の鋏には、誰かの腕が刺さっている。

……ダメだ。もう見ている事すらできない。

「トールちゃん」

キヨカが、よたよたと走ってくる。

「キヨカ……」

もう、この場から逃げたい。

こんな場所にいたくない。

どうしてこうなったんだ？

なにがいけなかったんだ？

俺たちは止めただろ。

どうして、この人たちは命を捨てにいったんだ。

あり得ないだろ。

無茶だってわからなかったのか。

残った自警団の中には、ゴーウォンさんの姿があった。さすがに、彼は動かなかったようだ。けど、仲間を止める事はできなかった。

彼なら止める事ができたはずだ。

いや、彼もその危険性を認識していなかったのかもしれない。彼が特別じゃない。彼だって、同じなんだ。

誰を責める事もできない。

自己責任。

それに尽きるんだろう。

だが、それで片付けられるのか？

現に命が失われている。

俺の目の前で。

この旅は、その危険性があるってわかっていた。

だけど、こうして目の当たりにすると、それは全く別のものだ。

想像と予測から、一気に現実を見せつけられる。

その凄惨な赤が、俺の目の前を塗りつぶしていく。

「トールちゃん……」

もう、なにも見たくない。

「避けよ、

……………？」

蜘蛛(アラネーオ)の声か？

なにも感じる事ができない。

「避けよ、

もう一度、声が聞こえた気がした。

ブンとなにかが風を切る音とする。

その直後、なにかに突き飛ばされた。

「がっ……」

「トールちゃん！」

キヨカがこっちを見ているんだと思う。だけど、俺はただなにかに吹っ飛ばされるだけだ。

地面に顔を打ち付け痛いはずだけど、なにも感じない。ただ、鼻のあたりが熱い。口の中も、苦い感じがする。

「撤退せよ、

声は聞こえるが、体は動かない。

「資格者(ティトーロン)よ 撤退せよ、

「……………えっ？ あ、うん」

蜘蛛(アラネーオ)は最初は俺に語り掛けていたみたいだけど、俺が反応しないので、どうやらキヨカに語り掛ける事にしたらしい。

「トールちゃん、逃げよう」

キヨカが駆け寄ってきたみたいだけど、なにも考えられない。なにも感じない。

「トールちゃん、トールちゃん」

体が揺れているように思う。だけど、ただ俺の意識が揺れているだけじゃないのか。

「トールちゃん、逃げようよ」

「撤退せよ、

「……ダメっぽいよ。アーちゃん、無理矢理できないかな？」

「承諾、

ぐいっと体が浮いた気がする。

「アーちゃん、トールちゃんをお願いね」

体がふわふわする。

「ゴーウォンさんたちも逃げて下さい」

なんだか、大きな足音のようなものがする。

だけど、どうなってるのかわからない。

目の前が真っ白だ。それどころか、頭も真っ白だ。

俺は俺だよな。

それを保つだけで精一杯だ。

「アーちゃん、逃げよう」

ふわふわしたまま、風を感じていた。

「トールちゃん、しっかりしろっ！」

思い切り頬を叩かれる。

じんじんとした痛みで、ようやく覚醒してくる。

「目を覚ませ、男の子なら！」

頬が熱を持って熱くなる。

ヒリヒリというような痛みを乗り越えて、熱くなっている。

「シャキッとしなさい！」

頬だけじゃなく、背中も叩かれる。

それには、思わず息が止まりそうになる。

「そんなんじゃ、私を護れないぞ」

ガシッと肩を掴まれる。

「トールちゃん、しっかりしてよ」

目の前にキヨカの顔がある。

「キヨ……カ」

その目には、なにかが光っている。

それがこぼれるのを、必死に堪えている。

「トールちゃん、大丈夫？」

顔を覗き込んでくる。

ここはどこだ？ それにどうなった？

「キヨカ、俺……」

「ん？」

「そうだ。自警団の……。それに、蟲(ベステート)」

どうやら横になっていたらしい。がばっと上体を起こす。

「トールちゃん、びっくりするよ……」

キヨカが慌てて避ける。

「すまん。……って、それよりも蟲(ベステート)だ」

俺もぶつかりそうになって驚いた。

どうやら、ここはどこかの道らしい。近くには誰もいない。

道の真ん中で、俺は寝ていたのか？

「落ち着いて。ってというか、落ち着きなさい」

パシッと両頬を両手で挟まれる。

「ってえ～」

「どう？ 落ち着いた？」

「なにすんだよ」

「お・ち・つ・い・た？」

キッとキヨカが睨んでくる。

「な、なんだよ……」

「冷静になって。そして、現状を受け入れて」

「なに言ってんだよ。俺は冷静だぞ。それよりも蟲(ベステート)だろ」

「やっぱりまだダメだ。いいから、一瞬でいいから忘れて」

「いやいや、それは無理だろ」

「無理じゃない。いいから。お願い……」

キヨカはぎゅっと抱きついてくる。

「お願い……。壊れちゃイヤだから。忘れてよ……」

声に涙が混じっている。

キヨカがこんな風になるなんて……。どうしたらいいのかわからない。ただ、されるがままになっているだけだ。

「トールちゃん、忘れよう……」

「キヨカ……」

「ねえ、落ち着いて聞いて」

落ち着けて言われてもな……。正直、どうすればいいのかわからない。意識して落ち着けるものじゃないだろ。

「その前に、蟲(ベステート)はどうなったんだ？」

「ねえ、忘れよう。今は忘れちゃおう」

抱きつく力が強くなる。

「それは無理だろ。俺たちは……」

「トールちゃん、忘れよう」

言葉を遮られる。

「キヨ……」

「忘れて。お願いだから」

どうしたんだ？ 蟲(ベステート)の事を忘れようなんて、おかしいだろ。

俺たちは、蟲(ベステート)を封印するために旅してるんだぞ。それを忘れるなんて、あっちゃいけないだろ。

それは、キヨカだってわかってるはずだろ。

それなのに、どうして……。

「トールちゃん、今は休もうよ」

休む？

蟲(ベステート)は封印したのか？

「キヨカ、蟲(ベステート)は封印できたんだよな」

俺の記憶は曖昧(あいまい)だ。

戦っていた記憶はある。だけど、ほとんどないようなものだ。ふっと消えてしまっている。

「……………」

ん？ どうしたんだ？ キヨカはなにも答えない。

もしかして、この世界を離れるのが淋しいのか？ やっぱり、屋台に未練があるんだろうか。

「キヨカ？」

「トールちゃん。蟲(ベステート)はまだ封印できてないんだ」

なんだって？

「おい、それじゃ……。こんな事してる場合じゃないだろ。……って、もしかして、どこかに行ったのか？」

封印がまだだとして、こうしているって事は、蟲(ベステート)が逃げたかして、姿を見失ったって事か。

「とにかく、今は休もうよ」

「そうだな。確かに疲れてるかもな」

節々が確かに痛い。

キヨカも休めって言うてくれてるし、今は休んだ方がよさそうだな。

「じゃあ、宿に戻るか」

「……うん、そうだね」

キヨカは周囲を気にしているような感じだ。どうしたんだろう？

「お二人とも、ご無事でしたか」

と、そこへゴーウォンさんが駆けてきた。

「はい、なんとか。そちらは？」

キヨカが対応する。

「こちらも、なんとか撤退しました。しかし……」

そこまで言って、ふっと顔を伏せる。

「とにかく、避難が最優先です」

「しかし、あれはなんなのですか？ お二人は、あれをご存じなのですか？」

そうだよな。やっぱり気になるよな。

俺たちは、そんな相手と戦ってたわけだし、しょうがないか。

「知ってます。あいつを封印するのが、俺たちの旅の目的ですから」

そう——蟲(ベステート)の封印は俺たちの旅の目的であり、使命だ。

「旅の目的……ですか」

ゴーウォンさんは、驚いたような、どこか納得したような顔をする。

「あなた方は、常にああいうものの相手をされていたわけですか」

「……まあ、ここ最近なんですけど」

「そうですか。確かに堂々とした戦い方でした。自警団が形だけとなった我々では、とてもではありませんが敵いませんね」

それには同意できる。

この人たちが弱いわけじゃないと思う。通常の武器が、蟲(ベステート)に通用しないという事がある。だから、四刀(しとう)を使えないと、相手ができない。もっとも、俺だって使いこなせてい

るかどうか……。

「そういうわけなので、自警団にはこの国の人たちの避難誘導をして下さい。あいつは――蟲(ベステート)は、俺たちがなんとかします」

「トールちゃん、そんな言い方……」

「……心苦しいですが、我々では足手まといにしかなりそうにありません。その通りですね。我々にできる事だけをしましょう。ただ、ここは我々の国です。見捨てる事だけはできません」

「わかってます。俺たちが、きちんと封印してみせます」

「信じましょう……。どうやら、それしかできそうにない」

わかってくれてよかった。ここでゴネられて、自分たちが戦うなんて事になったら、大変な事になるところだった。

「それでは、我々は避難誘導を続けましょう。ただし、避難場所に迫って来た場合は、対処しますよ」

「ん？」

避難誘導を続ける？

……どういう事だ？

「キヨカ、蟲(ベステート)は……」

「トールちゃん、今は無理だよ」

「どういう事だよ。もしかして、まだ暴れてるのか？」

その言葉に、ゴーウォンさんは、おや？ と呟く。

「キヨカ、教えてくれ」

キヨカの肩を掴む。

「トールちゃん、放して」

静かな目で見られて、力が抜けていく。

「おい……」

「トールちゃん、今はダメ」

「なに言ってんだよ」

「ダメったらダメなの」

キヨカがしがみついて止めてくる。

「ゴーウォンさんたちは、とにかく逃げて下さい」

「しかし……大丈夫ですか？」

俺たちのやり取りを見れば、誰だって不安になるだろ。キヨカのやつ、どうしたってんだ？
意味がわからない。

「キヨカ、蟲(ベステート)の封印をしないと……」

「無理だよ」

「なっ」

強い視線で射抜かれる。

「今のトールちゃんじゃ、絶対に無理」

「お前な……。確かに俺の作戦は失敗だったけどー」

「そうじゃないんだよ。絶対に無理なんだよ」

言葉を被せてくる。

「なにが言いたいんだよ」

「すぐにわかるよ。今のトールちゃんは、戦えないんだよ」

「戦えないって……。そりゃ、気を失ってたかもしれないけど、特に怪我はないみたいだし」

「怪我ならしてるよ。とっても大きな怪我だよ」

「はぁ？ どこだよ」

自分の体を見るが、特に傷はなさそうだ。そもそも、特に痛い箇所もない。

「ゴーウォンさん、とにかく逃げて下さい。トールちゃんは、今は休んでて」

「お前、おかしいぞ」

変だ。いつものキヨカじゃない。

「変でもいいよ。とにかく、トールちゃんはダメ。蟲(ベステート)は、私とアーちゃんでき何とかするよ」

そう言うなり、キヨカは走り出す。

「おい、キヨカ」

俺の声を振り払って、キヨカは走っていく。

「ったく……」

どうしたってんだ？

やっぱり変だ。

なにが言いたいんだ？

「とにかく、ゴーウォンさんは、避難していて下さい」

風伯を握り締め、キヨカの後を追う。

結局、キヨカに追いつく事はできなかった。

そりゃ、蜘蛛(アラネーオ)に乗っていったらな……。

そういうわけで、俺がそこに到着した時は、既に蜘蛛(アラネーオ)が蟲(ベステート)と闘っていた。

「なっ……」

その事には特に思うところはない。驚いたのは、その周囲の光景だった。

「……………どういう事だ？」

周囲には、赤いものが散っている。

地面はもちろん、近くの建物の壁にも飛沫(しぶき)のように、赤いものが付着している。

「う、うわあああっっ！」

途端、頭が痛くなる。

思わず頭を抱えて蹲(うづくま)る。

なんだ、これは。

どうなってるんだ？

あまりの痛さに意識が遠くなっていく。

「トールちゃん、来ちゃったんだ……。アーちゃん」

了解せり、

トールちゃんの姿を見つけて、ああやっぱりと思った。トールちゃんの性格なら、来ちゃダメって言うても来ちゃうんだろうな。

わかっていたけど、止める事もできなかった。

私じゃトールちゃんを護れない。だから、アーちゃんに頼むしかない。それが、アーちゃんの負担になるとしても。

トールちゃんは、その辺をわかってないんだろうな。

自分がお荷物になってるんだって事。

トールちゃんは優しすぎるんだよ。心が弱すぎるんだよ。

人の死を受け止められないんだ。

……なんて、私だって受け止めているわけじゃないんだけど。

ただ、現実だって事を認めるだけだ。理解も納得も必要ない。

言い方は悪いかもだけど、割り切るしかない。そうやっていくしかないんだ。

さっすが、アーちゃんは私が考えてた事をやってくれる。

トールちゃんを糸でぐるぐる巻きにして、遠くへぽいっ。

悪いけど、今は邪魔なんだよ。

私だって余裕はないんだぞ。だって、私にはなにもできない。

ただ、状況を見ているだけだ。

正直、私だって戦いたいと思うよ。

おじいちゃんに、鍛えられてきたんだもん。伊達と一緒に住んでたわけじゃないもんね。私だって、そこいらの剣道少女よりは、腕はいいと思ってるもん。まあ、インターハイとか出た事ないんだけど。

部活としてするのって、馴染めなかったんだよね。ぶっちゃけ、音楽の方が好きだったし。

そうだ。音楽だ。

鞆をがさごそして、フルートのケースを出す。

というわけで、フルートを取り出して――

～～～♪

即興で演奏しよう。特になにも考えない。指が動くまま、気持ち溢れるまま。奏でる。

私にできるのはこのくらいだもんね。

心から湧き出る歌を奏でるだけ。

そんな私の即興音楽に、アーちゃんが反応する。そして、蟲(ベステート)も反応する。

アーちゃんに関しては、動きがよくなった感じだけど、蟲(ベステート)は逆だ。なんだか動きが止まった。

あれ？ どうしたんだろう？

よくわからないけど、今がチャンスだ。

(アーちゃん)

心で語り掛ける。

「承知、

アーちゃんも、タイミングはわかっていたみたいだ。動きが鈍った蟲(ベステート)に、糸を絡めていく。

蟲(ベステート)は身動きせずに、されるがままになっている。

あれ？ もしかして、この音ってかなり効果的だったの？

私、蟲(ベステート)と戦えてる？

だとしたら、これってすごいよね。

私、音だけで戦ってるよ。音で戦う女の子って、なんだかすごくない？ まあ、女の子じゃなくてもだけど。

もしかして、これなら……。

トールちゃんがいなくてもいいとは思わないけど、っていうか、それは可哀想だからね——でも、私だけでもなんとかできるんだ。

もしかしたら、今回だけかもしれないけど、それでもすごいよね。

(アーちゃん、そのまま封印できる？)

「可、

よし。これでなんとかできるかもしれない。

トールちゃん、起きたらびっくりするだろうな。私が戦ったんだよ。

……って、信じてくれなさそうだよ。

その時は、アーちゃんが証人になってくれるかな。

……でも、それでも信用してくれなさそう。

まあいいや。別にそうして欲しいから、こうしているわけじゃないんだし。

私だってできるんだぞって、そう自分が思えればいいじゃない。

もちろん、認めてもらえたらそれが一番だけど。

~~~~♪

テンションが上がったので、自然と音が変わる。

そのせいなのか、急に蟲(ベステート)が動き出した。

蟲(ベステート)はぐにぐにと体を動かして、アーちゃんの糸を切っていく。

ぼぞっと尻尾が出てきたと思ったら、そのまま体に絡まっている糸を切っていく。

アーちゃんは、何度も糸を絡めていくけど、それよりも切る方が早かった。

結局、蟲(ベステート)はアーちゃんの糸をふりほどき、自由になってしまった。

「私のせい？」

私がメロディを変えたから？

そうとしか考えられない。

私がリズムを変えた途端、動きが変わったんだもん。

「ごめん、アーちゃん」

「謝罪 無用、

アーちゃんは、一度距離をとって、相手の様子を窺っている。

でも、蟲(ベステート)はその場から動こうとしない。

もしかして、向こうもこっちの動きを窺っているの？

さっきみたいな音が……とか？

だとしたら、次がないかもしれない。

ここで一気に終わらせないと。

もう一度フルートを構える。

「っ！」

それに反応して、蟲(ベステート)が動き出す。

同時に、アーちゃんも動いて、私を庇うように前に出る。

危ない。

その想いと音が同時だった。

～♪

メロディもリズムもない音。

ただ吹き鳴らしただけの音。

その音に反応して、蟲(ベステート)は後ろに跳ぶ。

よかった……。

そう思ったら、自然と音が出てきた。

~~~~~♪

今度はメロディもリズムもある。きちんとしたビートになっている。

その音に反応して、蟲(ベステート)は動かなくなっていく。

(アーちゃん、今)

「承知、

もう一度、アーちゃんは糸を絡めていく。

今度はこのままの音が続けよう。途中で変えたりしない。

即興だけど、音は私の中にある。

~~~~♪

私から溢れた音は、アーちゃんに力を与え、蟲(ベステート)の動きを止める。

今度こそ。

気を緩める事なく、最後まで続けよう。

音が私の武器だ。

さあ、私の戦いだ。

動きを止めた蟲(ベステート)を糸でぐるぐる巻きにしたアーちゃんは、捕食を始める。

その間も、私は演奏を続けている。この音が止むのは、完全に封印できた時だ。

(アーちゃん、もうちょっとだよ)

音で伝えられないけど、心で伝える。

私の演奏をBGMに、アーちゃんは封印を終えた。

「封印完了、

その声を聞いて、私は演奏を止める。もちろん、ちゃんと終わらせてからね。

「お疲れさま、アーちゃん」

アーちゃんにぎゅっと抱きつく。

本当にお疲れさま。

そして、頑張ったぞ、私。

全力で自分を褒める。そうでないと、誰も褒めてくれないよね。私、褒められて伸びる子なのに。

「資格者(ティトーロン) 協力感謝せり、

「私はたいした事はしてないよ。でも、私でも役に立ててよかったよ」

「資格者(ティトーロン)には 資格者(ティトーロン)たる能力あり 故に 我存在せり、

「……う～ん、なんだかよくわからないんだけど、私は私でいいって事だよ」

「是、

これって、アーちゃんなりに褒めてくれてる……んだよね？ まあ、喜んでおこう。

「それはそれとして、トールちゃんは大丈夫なのかな？」

「経過不明 但し 能力に異変あり、

「……えっ？ ちょっと、アーちゃん、詳しく教えてよ」

今、なんだか変な事を聞いた気がするんだけど……。

「詳細不明、

「不明って……。それが一番重要なんじゃないの？ っていうか、トールちゃん大丈夫なの？」

「生命活動 異常なし 但し 能力に異変あり、

能力……。

トールちゃん的能力ってなんだっけ？

神様に教えてもらった気がするんだけどな……。

もう結構前に聞いたからな……忘れちゃったよ。

でも異変ってどんなだろ。

アーちゃんにもわからないんだよね。

それこそ、神様に訊きたいんだけど、どうしたらいいのかわからないんだよね。

私だけでどうすればいいんだろう？

っていうか、トールちゃんはあるなし……。

どうしたらいいんだろう？

「アーちゃん、戻って」

お疲れ様。ゆっくり休んでね。

白いオープンフィンガーグローブをはめた左手を撫でる。

「さて、と」

とにかく、この世界の蟲(ベステート)は封印したわけだし、やっぱり次の世界に行かないと……だよ。つまり、この世界とはお別れ。

「だったら、する事はひとつじゃん」

ズビシッと天を指す。

「屋台の制覇だっ！」

屋台を制覇しないと。心残りがあっちゃいけないよね。

さてと、屋台だ屋台。

屋台に行かずしてどうする。

屋台に行けば、全回復。キヨカちゃんヒーリング。

体力ゲージは満タンだよ。

「……………って、トールちゃんが問題だよ」

う～む。トールちゃんが邪魔だ。

今は糸でぐるぐる巻きだから、なんだか繭みたいだ。

コクーン(繭)のトールちゃんだから、トルーンとでも名付けてやろうかな。

にししと笑う。

それにしても、ダメージ受けすぎだよ。立ち直れるかな……。

このまま立ち直れなかったらどうしよう。

トールちゃんがここでリタイアなんて事になっちゃったら……大変っていうレベルじゃないよ。それこそ、世界存亡の危機だよ。いや、冗談とかじゃなくて、これってマジでそうだよ。

それよりも重要なのは、屋台だよ。屋台、屋台、屋台。

屋台が私を待っている。

わくわくだね。

屋台が私の生き甲斐だよ。

今日はなにを食べようかな。きっと、これが最後になるだろうし、食べ納めだもんね。最後に食べたものが、この世界での最後の思い出になる。

これは重要だ。

緊張してお腹も空いたし、いっぱい食べれそうかな。

ぽんぽんとお腹と相談。

よし、食べるぞ～。

じゃあ、とりあえず宿に帰ろうかな。

って事は、トールちゃんをなんとかしないとな。

繭状のトールちゃんートルーンをどうしてやろうか。

これを移動させるのは……どうしよう。運べないよ。

ん？ よく見たらころころなんだよね。

じゃあ……。

「えいっ」

試しにトルーンを押してみる。

ころん。

「おっ」

につばあ。

こいつは面白い。

もう一回。

ころん。

「うっほ〜い」

トルーンはいい感じに転がっていく。

「おもしろ〜い」

これなら楽だ。

トルーンも手間を省いてくれて、そこだけはよかったよ。

このまま、ころころと転がしていこう。

……でも、これはこれで難しいぞ。

小学生の頃、運動会でした大玉転がしを思い出すね。

「うんしょ、うんしょ……」

たまに壁にぶつげながら、順調に進んでいく。

うん、順調順調。

ころころがつんころごんころころどんころころころ……。

えへっ。順調順調。

繭みたいになってるから、中のトルちゃんは大丈夫だよ。きっと。多分……。ダメだったら、その時はその時だよ。

うっひゃあ。たっのしい〜。

ころころトルーンを転がして、ようやく宿に到着。

いっばいぶつけたけど、赦してねん。

見た感じ、特に傷はなさそうだし、大丈夫だよ。

あっ、転がしたから、中のトルちゃんは、ぐるんぐるんになってるよね。でも、気絶してるっぽいから、それも大丈夫……だよ。だよ、ね、ね。

「さて、ここからどうしようかな」

宿まで来たのはいいものの、このまま中には入れないよね。階段が無理だ。

「じゃあ、どうしようかな……。とりあえず、この糸をなんとかしないと、だね」

これはこれで大変そうだな……。

アーちゃんに、しっかりくるんでもらったもんな。

しょうがないか。

ぶちかますしかない。

「そりゃっ」

意を決して剥がそうと掴もうとして、

「ほわっ」

はらりと繭が解けていく。

「うわあっ……」

すごい……。

今まであんなに頑丈だったのに、それが嘘みたいだ。はらはらと解けていく。

そして、解けた糸は、しゅるしゅると消えていく。

「すごおい」

不思議不思議。

これって、やっぱりアーちゃんが……なのかな？

まあ、そうとしか考えられないよね。

さすがアーちゃんだね。サービス満点。いい仕事してくれますな。

思ったよりも簡単に糸がなくなって、トルーンはトールちゃんに早変わり。

「……って、ここからどうするんだよ」

トルーンじゃなくなっても、結局どうしようもないんだよね。

気を失ってるトールちゃんを抱えて……なんて、乙女の私には無理。逆はありなんだけどな……。

はてさて、どうしたものか。

誰かに手伝ってもらうにも、誰もいやしない。

「そりゃそっか」

ゴーウオンさんをお願いして、みんなを避難させてもらったんだもんね。こんな場所に残ってるわけないよね。

だとしたら、誰かが戻ってくるのを待つしかないのか。

でも、どのタイミングで戻ればいいのか、きっとわからないよね。

もう大丈夫なんだけど、それを伝える事ができてない。

「しまった……」

そうだよ。もう大丈夫だよって、ちゃんと教えてあげないといけないよね。

どうすればいいんだろう？

私がひとつ走りすればいいんだろうけど、みんながどこにいるのか知らないし、こんな状態のトールちゃんを放置……は、まあいいか。大丈夫でしょ。

となると、やっぱり問題はみんながいる場所だよな。

「探すしかないか」

そうと決まれば、とりあえずトールちゃんを……、

「よいしょっ。よいしょっと……」

腋から手を入れて、ずるずるとトールちゃんを引きずる。そして、壁にもたれかけさせておく。

「これで大丈夫でしょ」

当面はこれでいいはずだ。

これ以上を、か弱い乙女のキヨカちゃんに求められても困る。精一杯、できる事はした。

「というわけで、みんなを探しますか」

できれば、キッキさんかゴーウォンさんに会えればいいんだけど、とりあえず誰かに言えばいいよね。

「でも……なんて説明したらいいんだろう？」

もう大丈夫ですよ……なんて、私が言っても信じてもらえないかもしれないよね。

所詮、私は旅人で、余所者だもんね。

やっぱり、キッキさんかゴーウォンさんを探さないとだね。

とりあえず屋台がある方へ向かった私は……、

「おおっ」

見事にこの国の人たちを発見したのであります。

「私すごい」

屋台が並ぶはずの場所に、まさに屋台に群がるように人が集まっている。残念なのは、屋台はないって事だね。

「……もしかして、今日は屋台はお休みなのかな」

この状態だと、さすがに営業しないんだろうな……。

お休みの可能性があるなんて、全く考えてなかったよ。

これじゃ、最後の晚餐——なんか不吉だな——は無理なのかな。

昨日のが、最後になっちゃうのかな。

まだ食べてない屋台もあったのにな……。

全制覇は夢と消えてしまうのでした……ちゃんちゃん。

「いやいや、きっと大丈夫。屋台は営業するよ」

言霊を信じて口にする。

何事も前向きに考えないといけないよね。

「とりあえず、キッキさんかゴーウォンさんを探さないと……だね」

そう思うものの、人が多くて見つけれられる気がしない。

だけど、見つかるって信じよう。

「どこかな……。どこだろうな……」

この状況で見つけようと思えば、やっぱり大声で叫べばいいんだろうな……。だけど、それってなんだか恥ずかしいよね。私もだけど、呼ばれる方も。

「うう～、どうしよう」

私がおここにいていう事を知らせる方法か……。

……ん？ 私が探さなくても、向こうが私を見つけてくれるってのもありなんだよね。

だったら、私だけが目立てばいいのか。

……って、それはそれで恥ずかしいけど、恥ずかしさをあまり感じなくてそうできる方法がある。

「やってみますか」

荷物の中から、フルーツのケースを取り出して組み立てる。

できれば、どこか他よりも高い場所の方がいいんだけど……なさそうだね。

しょうがない。ここでいっか。

「キッキさん、ゴーウォンさん、どっちか私を見つけてね」

フルーツを構える。

さあ、キヨカちゃんの独奏会(ソロコンサート)だ。



~~~~♪

演奏するのは.....やっぱり、さっきまで吹いていた即興の曲でしょ。この曲のお蔭で蟲(ベスト)を封印できたんだから縁起がいいもんね。

私が演奏を始めると、周囲にいた人たちから順にざわつき始めた。

そりゃ、いきなりこんな素敵な演奏が始まれば、なんだろうって思うよね。

このキヨカちゃんの演奏を聴けるんだから、今日はラッキーだぞ。

お代は、屋台の営業でいいかな。

~~~~~♪

演奏をしていると、自然と私を中心に輪ができていく。いい傾向だ。

これで、向こうが私を見つけてくれるだろう。

最初は私だって気付かなくても、姿を見ればわかるだろうし。

私は、それを信じて演奏するだけだ。

できれば、早く見つけてよね。

~~~~~♪

演奏を続けていると、なんだか楽しくなってきた。

元々オリジナルの即興曲なので、どうとでもできる。

次第にアドリブが増え.....っていうか、アドリブもなにも、元々決まったものはないもんね。

適当な演奏は、次第に盛り上がってくる。観客がというよりは、私が。

ちょっと.....ううん、かなり楽しいかも。

即興の演奏会は、気兼ねしなくていいから楽かも。

コンテストとか発表会じゃないもんね。

自由に。カンタービレだね。

こうやって自由に吹いていると、昔を思い出すよ.....って、そんな昔でもないんだけどね。ずっと昔に思えるけど、ついこの前だもんね。

演奏をしていると、次第に観客が増えていっている。

こんな大勢の人に、路上で聴いてもらうなんて初めてかも。まあ、元々路上で演奏はしない.....っていうか、周りは畑と田圃ばかりだったから、誰にも気兼ねせずに吹いていただけだもんね。さすがに、人が多い街に出てまで演奏した事なかったもんね。

こうして路上で聴いてもらうのって、気持ちいいかも。

駅前でギターを弾いている人たちって、こういう気分なのかな。

たとえ観客がいなくても、演奏しているっていうだけで気持ちいい。もちろん、聴いてくれる人がいる方がいいんだけど。

~~~~~♪

演奏していると、気分が高揚してくる。

ハイテンションのキヨカちゃんは、演奏もますますノリノリになってきちゃったのでありました。

元々が即興なので、どうとでもなるんだよね。そもそも、どこで終わりなのかも決まってない

わけだし。

もう一度演奏するのは、そろそろ難しいかな。大まかな流れは憶えてるんだけど、細かな譜割りは忘れちゃった。

その時のノリでなんとかするしかないよね。

そう割り切って、気分のままに演奏を続ける。

指は適当だけど、みんなは真剣に聴いてくれている。

~~~~~♪

すごい気持ちいい。

自分でも驚くくらい、指がスムーズに動く。

適当だっていうのもあるんだけど、次々に音が浮かんでくる。

こういう流れでしょうって、普段作曲なんてしないのに浮かんでくる。

今の調子で作曲なんかしちゃったら、名曲が誕生しちゃうんじゃないの？

っていうか、今演奏している曲を譜面に書いておこうかな。

五線譜ないんだけど。

せめてコードでだけでも記録しておいた方がいいかもしれない。

旅の途中で作った曲なんて、なんだかカッコいいよね。

.....って、だからもう記憶が曖昧の部分があるんだってば。

こりゃ、もう一回憶えているところを吹きながら、思い出したり調整したりしていかないとだね。

そんな事よりも、今はこの瞬間を楽しもう。

今はキヨカちゃんの、独奏会なんだもん。

滅多にない機会だもんね。

それに、こんなに思い切り演奏するのって、久しぶりだし。

とにかく楽しもう.....って、あれ？ そういえば、私はどうしてフルートを吹き始めたんだっけ？

えっと.....なにか理由があったはず。

なんだっけ？

あまりに楽しすぎて、なにか忘れてる気がする。

えっと.....。

吹きながら、思い出すのって難しいよ。

音を記憶しながら、昔の事を思い出しながら、次の音を考えながら.....私は一人だったの。

とにかく今を楽しもう。これを最優先にする。

なので、次の音を考えながら、今の音を記憶していく。

~~~~~♪

ちよくちよく、こうやって演奏してみようかな。

私もテンションが上がるし、なによりも気分転換になる。

毎日、蟲(ベステート)の事ばかりだと、暗くなっちゃうよね。明るく楽しく――これが重要だ

よね。

~~~~~♪

演奏しながら、観客の顔を見ると、みんな笑顔で聴いてくれている。最高の聴衆だ。

それを見ていると、ますます演奏が楽しくなってくる。

こんな気持ちいい演奏ができるなんて、最高の気分。

元の世界に帰れたら、路上ライブでもしようかな.....。

栄琉(はる)の駅前だったら、それなりに人がいるから、立ち止まって聴いてくれる人がいるかも

。

もし誰も聴いてくれなくても、演奏できるだけでもいいかな。それだけでも気持ちよさそうだ

。もちろん、聴いてくれる人がいた方がいいんだけどね。

この世界の人みたいに、聴いてくれるといいな.....。

そう思って聴衆を見ると、知っている人たちを見つけた。

キッキさんとゴーウォンさんだ。

やっほー！ って手を振りたいけど、フルートを演奏していると、そんな事ができるわけないよね。かといって、本体を動かすと音も揺れるから、それもできない。

なんとなくの視線で伝えるしかできない。

キッキさんとゴーウォンさんは、人の波を掻き分けて、私の方に近付こうとしている。だけど、人が多すぎてなかなか近付けないみたいだ。

それでも、なんとか近付いてこようとしている。

.....って、そうだ。

急に思い出したよ。

私も二人を探してたんだっ。

目の前にいるじゃない。

二人を探して.....なにするんだっけ？

そうだ。

もう大丈夫だっていう事を伝えて.....って、これだけ集まってるなら、それはすぐにできそうだね。

あとは、トールちゃんをなんとかしないと。せめて、部屋まで運ぶのを手伝ってもらいたい。

か弱いキヨカちゃんだけじゃ、トールちゃんを運べないもんね。

建物の中でアーちゃんを呼び出すわけにもいかないし。

キッキさんとゴーウォンさんが見つかったなら、こうして演奏しているいみもないのか。元々、二人を見つける.....というか、見つけてもらうために始めたわけだし。

目的は達成されたわけだ。

でも、演奏しているうちに、だんだん気持ちよくなってきたんだよね。思い切り演奏できるなんて、やっぱり気持ちいいね。

この世界を旅立つ前に、もう一度くらい演奏できればいいな.....。

ううん、演奏しよう。

許可なんていいじゃない。ゲリラライブだよ。

そもそも、今だってそうだもんね。

どうせ、この世界を離れるんだから、別にいいよね。

誰かに危害を加えるわけじゃないし、逮捕されたりしないよね。

犯罪者になるのはいい気はしないもんね。

さて、そろそろ演奏は終わらせた方がいいかな。

元々、即興だからどこで終わらせるか決まってないんだけど。

ここから、ババッと盛り上げて、クライマックス。

そして、一気に落としていこう。

余韻なしでフィナーレ。

そうしよう。

だいたいのが構想ができたなら、後は音を選んでいだけだ。

今までの流れを踏まえて、テンポを少しずつ上げていく。

そして、一気に駆け上がるようにテンポアップ。

キヨカちゃんの超絶技法を感じなさい。

自画自賛の指使いで奏でる。

ここから見ても、聴衆が驚いているのがわかる。

普段、音楽をしていなくても、すごいのがわかるよね。

それくらいの指使い。

コンクールだと、あまり意味ないんだよね。そもそもの課題曲が、この技術を必要としてないもんね。

自由曲だって、自分が作曲したものじゃないから、やっぱり披露する事はない。

所詮、自己満足だけの技術だもんね。

そんな技術をひけらかして、一気にフィナーレ！

フルートを口から離し、息を吸い込む。

ふう～。

疲れた……。

でも、すっごく気持ちよかった。

そんな気持ちをこめて、礼をする。

すると、大歓声と拍手の音が聞こえてくる。

まるでスポットライトのように、太陽の光がスーッと射し込んでくる。光はじんわりと広がっていく。柔らかな光が、舞台を照らしてくれる。

ゆっくりと顔を上げると、聴衆の笑顔と拍手が飛び込んでくる。

うっわあ～。

こんなの初めてだ。

元々みんな立っていたので、スタンディングオベーションってわけでもないんだけど、そっちの方が嬉しいからそういう事にしておこう。

すっごい気持ちいい。

プロって、こんな感覚なんだろうな。そりゃ、ますます演奏に力が入るね。この感動は、他にはないよね。

ああ、もう最高。

絶頂だね。

エクスタシー！

ちょっと天狗になってもいいかな。

なっっちゃうよ。

いい？ いいよね。

答えは求めないけど。

キヨカちゃん、絶賛天狗中！

両手を挙げて、拍手と声援ににんえる。

一躍大スターだね。

スーパースターキヨカちゃん。

これはたまらんわ。

「ありがとう。ありがとう」

それに対して、さらに声援と拍手が。

こりゃ、いつまでも終わらないかもね。

.....ん？ ちょっと待て。

なにか物足りない気がする。

絶賛されているのはいいんだ。

だけど、なにかが足りない。

なんだろう？

演奏が終わった。

声援と拍手はある。

.....これでいいんだよね？

でも、やっぱりなにか忘れてるような.....。

いや、キッキさんとゴーウォンさんに話があるのはわかってるんだよ。

それ以外に、なんだか演奏していて物足りないというか、なにかが抜けているというか.....。

なんだ？

なにかが足りてない。

キヨカちゃんの魅力は最高潮。

キヨカちゃんの技術も最高潮。

キヨカちゃんの演奏は最高潮。

キヨカちゃんは全部が最高潮。

でも、キヨカちゃんはなにかが足りない。

「なんだろう.....」

自分がコンサートとかライブに行った時を思い出そう。

えっと……………演奏が終わって、演奏者が幕にはけて、それから……解散じゃないよ。終了してないよ。

「アンコール！」

そうだ、アンコールがないんだ。

普通、アンコールの大合唱があるよね。せめて手拍子だけとか。

それがないんだ。

だから物足りないんだ。

アンコールが欲しいよ。

……でも、それらしい動きはない。

この国って、そういうのなのかな。

っていうか、もう一回って思えなかったのかな。

いやいや、それはないでしょ。

これだけ盛り上がってるんだよ。つまんなかったって事はないよね。

だとしたら、そういう風習がないのかな。これって、日本だけなのかな？

ないものを求めてもしょうがないよね。

……………淋しいけど、諦めよう。

そんなこんなで、いい気分を味わっていると、キッキさんとゴーウォンさんが近くまでやってきた。

「キッキさん、ゴーウォンさん」

「ご無事でしたか」

「大丈夫でしたか」

二人とも、心配そうな顔でこっちを見る。

「この通り、私は大丈夫ですよ」

にっこりと笑みを返す。

「それと、もう大丈夫ですから。暴れていた蟲(ベステート)——あの巨大なものは、ちゃんと封印しました。もう安心していいですから、それをみんなに伝えて下さい」

伝えるべき事を伝える。

これで、国中の人が安心できるだろう。

「そうですか……よかった……」

それを聞いた二人は、糸が切れたようにへなへなと座り込む。

「よかったです……」

安心しきったらしく、しばらく動けそうにない。

どうしよう。もしかして、上手く伝えられないのかな……。

そう思ったけど、それは杞憂だった。

私の声が聞こえた人たちは、口々にその事について周囲と話し始める。その会話が伝播していき、一気に国中に広がっていく。

よかった……。これで、もう大丈夫かな。

蟲(ベステート)は封印できたし、ここでも使命は終わりだ。

後はトールちゃんと……って、そうだったよ。トールちゃんだ。

「ゴーウォンさん、お願いがあるんですけど……」

今にも気を失いそうなゴーウォンさんに話し掛ける。

「お願い……ですか？」

「ちょっと手伝って欲しいんですけど……」

トールちゃんの事を伝える。

「それはいけません。すぐに向かいます」

そう言うが早いか、ゴーウォンさんは駆けていく。だけど、人が多くて思うように進めていない。それでも、できるだけ速く行こうとしてくれている。道を開けてくれ、という声が響いている。

「私は……」

どうしたらいいんだろうね。

もちろん、私もトールちゃんの所に行くのが正解なんだろうね。

だけど、ここを動くのも名残惜(なごりお)しい。

そもそも、私を囲むように集まっているので、果たして私は移動できるのかな。

ゴーウォンさんみたいに、強引に行ける気がしない。

いっそ、アーちゃんを召還して、みんなが逃げたところを……って、これじゃパニックになるね。これはやめておこう。

やっぱり、ここを抜けるしかないんだよね……。

「私が道を作ります。さあ、どうぞ」

私の気持ちを読んだのか、キッキさんが手を差し伸べてくる。

「ありがとうございます」

私はその厚意をありがたくちょうだいする。

差し出してくれた手を取り、人混みの中に入っていく。気分はステージから観客にダイブする感じかな。ライブでそんなパフォーマンスをする人がいるらしい。

「すみません。道を開けて下さい」

キッキさんが言うと、みんなが道を開けてくれる。

なんという影響力。そして、協力的な人たち。

そんなキッキさんのお蔭で、思ったよりはすんなりと人混みを抜ける事ができた。

「すごいですね」

「さあ、急ぎましょう」

キッキさんは、急いで宿に向かうので必死なのかな。あまり周囲を気にする余裕はないっぽい。

っていうか、当事者の私が暢気すぎるのかも。

とにかく、トールちゃんが待っている宿に急がないとだね。

「はい」

キッキさんと二人で、人がいない街を走る。

宿に到着すると、既にゴーウォンさんがトールちゃんを抱えて運ぼうとしていた。

だけど、なかなか一人だと難しかったらしく、あたふたとしている。

それを見て、すかさずキッキさんが手伝いに向かう。

遅れまいと私も、トールちゃんの腋から手を入れて、体を支える。

三人掛かりで、ぐったりして動かないトールちゃんを部屋に運んで、ベッドに寝かせる。

そうすると、急に疲れが出てきて、私もベッドに倒れ込んでしまう。

「大丈夫ですか？」

キッキさんが声を掛けてくれるけど、答える力もなかった。

「お二人はお疲れだろうから、ゆっくり休ませてあげよう」

「そうね」

そんな会話が聞こえてくるけど、私は目を開けるのも辛かった。

そのまま、ゆっくりと意識を失い、眠りに落ちていく。

明るさを感じ、意識が覚醒していく。

明るいというよりも眩しい。

まるで、カーテンを閉めていない部屋に、朝日が差し込んできているみたいだ。

そんな眩しさと目を開ける。

「……………えっ？」

思わずそんな声が出た。

当たり前といえば当たり前のはずなので、驚く事なんかはないはずだ。

だけど、その当たり前は、この世界じゃ当たり前じゃなくて……。でも、今は当たり前になっている。

太陽が空に昇っている。

「どういう事なんだ？」

パニックになる。

いや、これが普通のはずなんだ。

別におかしい事はない。それを疑問に思う方が変なはずなんだ。

「もしかして、これって夢なのか？」

頬を抓ってみると痛い。

どうやら、夢じゃないらしい。

「夢じゃないなら、別の世界に移動した……？」

それこそ夢のような話だ。

世界を移動した記憶なんかない。

そもそも、少し前の記憶だってないんだ。だから、いつ眠ったのかさえわからない。

急に不安になって隣のベッドを見ると、キヨカが眠っている。

「よかった……」

キヨカがいる。それだけで安心できた。

次に部屋を見回す。

「一緒だよな」

数日間だけど、それなりに見慣れた部屋だ。

どうやら、世界を移動したわけでもないらしい。

それらを確認して、窓の外を見る。

街の風景も変わっていない。ただ、光のせいなのか、少しだけ違うように見える。だけど、それは雰囲気としてであって、建物が変わっているわけじゃない。

「どうなってるんだ？」

この世界に来て、太陽を見るのは初めてだ。

本当にあるのかさえ疑問だったし、来た時からなかったのも、そういうものだという気分になっていた。

太陽が昇らなくなったのは、この世界に来てから聞いていたので、存在はしているんだと思ってはいた。

「どうなってるんだ？」

そんな昇らないはずの太陽が、今まさに燦々と輝いている。

暗闇だった世界を明るく照らしている。

「どうなってるんだ？」

もう一度呟く。

太陽が昇らないという世界の異常。それが修復されている。

という事は、異常の原因が解消されたという事か。

「つまり、蟲(ベステート)が封印された？」

そうとしか考えられない。

だけど、俺にはそんな記憶はない。

蟲(ベステート)が現れたという記憶はある。

そして、その現場に向かったという記憶もある。

だけど、封印した記憶はない。

「キヨカがしたのか？」

眠っているキヨカを見る。

キヨカは幸せそうに眠っている。

特に怪我はしていないようだ。

「まさか、な」

キヨカが弱いとは思っていない。こいつだって、じいさんに鍛えられてるんだ。そこいらの同年代よりは、断然強い。

だけど、そうだからといって、蟲(ベステート)の相手ができるわけじゃない。

あれは特別だ。

俺だって、相手をできているかは微妙だ。それでも、四刀のお蔭でなんとかできている。

そう——四刀がなければ、蟲(ベステート)を相手にする事はできない。

だけど、キヨカには蜘蛛(アラネーオ)がいる。

蜘蛛(アラネーオ)なら蟲(ベステート)とほぼ対等に闘える。

「それでも、今回は苦戦してたよな」

俺と蜘蛛(アラネーオ)と一緒に戦っても、蟲(ベステート)の攻撃を避けるのが精一杯で、有効な攻撃はできなかった。

だから、蜘蛛(アラネーオ)だけで闘えたとは思えない。

「自警団か？」

あと戦力になりそうなのは……、

「いや、それはないな」

自警団はほぼ無力だ。弱いわけじゃないと思うけど、相手が悪すぎる。普通の武器は通用しない。

それに――

「うっ」

急に頭が痛くなり、思わず蹲り、手で押さえる。

痛みはすぐに治まった。

どうしたってんだ？ 自警団の事を考えたら、急に痛くなった。

「どうしちまったんだ？ なんだか、記憶も曖昧になっている気がする」

右手で額を押さえながら立ち上がる。

自警団の事もだし、蟲(ベステート)の事も記憶が曖昧になっている。

「こりゃ、キヨカに訊いてみるしかないか」

考えていても、答えは絶対に出ない。

俺だけじゃ無理だ。

「それにしても、太陽なんて久しぶりだな……」

窓から外を眺めて、キヨカが目を覚ますのを待つ事にしよう。

キヨカが目を覚ましたのは、それからしばらくしてだった。もうちょっと待つつもりだったけど、意外と早かった。もちろん、その方がありがたいんだけど。

「ううっ、眩しいよ」

キヨカは目をこすりながら起き上がる。

そして、周囲を確認するようにキョロキョロして、ゆっくりと大きな欠伸をする。

「私、あのまま寝ちゃったんだ……」

そして、俺の方を見て、

「トールちゃん、起きたんだね」

ベッドから勢いよく出ると、その勢いのまま抱きついてくる。

「お、おい……」

あまりに突然だったので、されるがままだ。

ぎゅっと首に手を回して抱きつかれる。

「え、えっと……」

どうなってるんだ？

俺はどうしたらいいんだ？

手の行き場所がなくて、なんとなくワキワキとさせる。

「よかったよ……。ねえ、大丈夫？」

抱きつく力を緩め、真正面から見られる。

思わずドキッとなる。

キヨカの顔が近いからだろう。この距離だと、このままキスでもできそうだ。

だけど、そんな雰囲気はない。キヨカの顔は、かなり真剣なものだった。

「ねえ、大丈夫？」

また訊かれる。

「大丈夫って、なにがだよ」

そう答えると、キヨカは考え込む。

「まあ、元気そうだし、大丈夫そうかな」

「よくわからないんだけど」

「記憶はないのか。でも、大丈夫だよね」

いや、なにが大丈夫なんだ？

俺はさっぱりわからない。

「なあ、どうしたんだよ。……つうか、いい加減離れろよ」

いつまでも抱きつかれているのは、色々とまずい。

「ええ～。せっかくだから、ぎゅってしてるよ」

キヨカは唇を尖らせる。

あまりに顔が近いものだから、キスをされるかと勘違いしてしまう。

「いいから離れろよ」

キヨカの体を離そうとする。行き場のなかった手の役目がようやくできた。

「可愛い女の子が抱きついてるんだよ。そうそうないチャンスなんだから、堪能すればいいのに」

「別にそんなのはいらん」

「なにそれ。そんな事、他の人に言ったら、男色かと思われちゃうよ。……………って、もしかして本当にそうだったりする？」

「そんなわけないだろ」

想像するだけでもぞっとする。

「だよねえ。トールちゃんは、かなりスタンダードだよね。逆に言えば、面白味がないんだよね。もうちょっと、フェチっぽいものがあるのもいいと思うんだけどな……。もしかして、私が知らないだけで、ムツリなにか考えてたりするのかなあ？」

目の前でにやにやされると、それだけでムカついてくる。

「どうでもいいだろ、そんな事」

とにかく、キヨカをひっぺがそうとする。

「あれえ？ もしかして、本当になにかこっそり考えてるの？」

「そうじゃねえよ。いいから離れろ」

「しょうがないな……」

ぶつぶつ言いながら、やっとキヨカが離れてくれる。

「そのままもう一度ベッドインでもよかったのに」

「そんな冗談、俺以外に言わない方がいいぞ」

「トールちゃんにしか言わないよ。それに冗談じゃないし。それにしても、トールちゃんってば独占欲だね」

「意味がわからん」

「まったく……。こいつは、たまにこうやって巫山戯るんだよな。」

「とにかく、トールちゃんが元気そうでよかったよ」

「なんだかよくわからないが、俺は元気だな」

事実、特に怪我もしていないようだし、痛みがあるわけでもない。

「そっか。よかったよかった」

そう言いながら、キヨカは窓の外を見る。

「うっわあ……。太陽が昇ってる」

「ああ、そのせいで目が覚めたんだ」

「そっか……。ちゃんと戻ったんだね」

戻った？

つまり、蟲(ベステート)が封印されたって事か。

「なあ、キヨカ」

「ん？」

「もしかして、蟲(ベステート)って封印されたのか？」

自分で言いながら、それはないだろうと反論している。キヨカからも、そういう返事があるものだと思っていた。

「うん、封印できたよ」

その言葉に、自分の耳を疑った。

そしてその次に、やっぱりこれは夢なんじゃないかと思った。

「トールちゃん、夢でも嘘でもないよ。現実だよ」

キヨカは満面の笑みでそう言う。

「封印したって……マジで？」

「うん、マジだよ。私とアーちゃんね。頑張ったんだから」

「キヨカと蜘蛛(アラネーオ)で？」

蜘蛛(アラネーオ)はわかる。

戦闘もできるし、そもそも封印は蜘蛛(アラネーオ)にしかできない。

キヨカもってというのがよくわからない。

そりゃ、蜘蛛(アラネーオ)の頑張りはキヨカの頑張りみたいなもんだし、キヨカが頑張ったっていうのも、そういう意味ならありだろう。

「なによ。やっぱり信じてくれないか……」

キヨカはそんな事は予想していたらしい。

「もしかして、お前も戦ったのか？」

「……そうだね。そうなっちゃうんだな、これが」

えっへんと胸を張る。ほどほどの胸を。

「記憶がない俺が言うのもなんだけど、本当なのか？」

「本当だよ。信じてくれないの？」

「信じたいけど、想像ができない」

風伯を扱えるならまだわかるんだが、キヨカは抜く事もできないはずだ。

鞘のままでも戦えなくはないが、それとて主に防ぐ事しかできないだろう。有効な攻撃はできないはずだ。鞘のままだと、本来の力を出す事ができない。

「ちょっとくらい、信じてくれてもいいと思うんだけどな……」

完全に不貞腐(ふてくさ)れてるな、こりゃ。

「だけど、信じるってのは、難しくないか？ そりゃ、キヨカだって、それなりに腕が立つけど、さすがに相手がな……」

「それなりっていうのは失礼だね。そこいらの同年代には負ける気はしないよ」

「実際に対戦した事ないだろ」

「それは………そうだけど」

「だろ？ 全国には、すげえやつらがごろごろいるんだよ。俺だって、勝てなかったやつは大勢いる」

「それは、剣道だからでしょ。トールちゃんと私のは、もっと実戦的なものじゃない。あんなお

上品なものじゃないでしょ」

「それは剣道家に対して失礼だと思うぞ」

「そう？ あんなのお上品すぎるじゃない」

「だからこそ、実力勝負だと俺は思うんだけどな。確かに、じいさんに教わったのは、実戦的なものだったけど、基本も教わってるだろ」

そういえば、じいさんが俺たちに、普通の剣道だけじゃなく、実戦的な剣術まで教えていたのは、今みたいな事を予測しての事だったのか？ まさか……と否定できる要素はない。本当にそうなんだろう。

「それはそうだけど……。って、話がずれてるよ。私だって、ちゃんと戦ったんだよ」

「まあ、全くのデタラメだとは思ってないって」

そう言うと、うう～と唸る。

「そうだ。アーちゃんに確かめてみてよ」

「蜘蛛(アラネーオ)に？」

まあ、蜘蛛(アラネーオ)なら嘘は言わないだろう。そう言うように命令されたとしても、蜘蛛(アラネーオ)なら言わない気がする。

「わかったよ」

「よし、覚悟はいいね」

どういう意味だよ。

「ああ、いいぜ」

キヨカの言い方に、妙に緊張してくる。

「アーちゃん、お願い」

キヨカは左手に話し掛ける。

`真実なり 虚偽なし、

脳内に蜘蛛(アラネーオ)の声が響く。

……端的だな。

「本当……なのか」

そう呟くと、どうだまいったか、という顔で見てくる。

「すまなかった。疑った俺が悪かった」

ここは素直に謝っておこう。

「およ、素直じゃん。さすがに学習してるね」

「実際、悪かったのは俺だしな。謝るべきは謝るさ」

正直、ちょっと癪ではある。だけど、こうするべき場面だ。

「キヨカが戦ったってのはわかったけど、実際どうだったんだよ。お前、風伯を扱えないだろ」

「そうだね。私には使えないんだよね。そんな私の武器は……」

そう言いながら、荷物をごそごとと漁る。

「これだよ」

そう言って取り出したのは、細長い箱だった。

「これって……」

箱で戦った……なんて、思うはずもない。その中身だという事はわかる。

その箱に入っているものは、あれしかない。

「お前、フルートは無事なんだろうな」

それはフルートの箱だ。

フルートで殴った……わけはないよな。

じゃあ、どうしたんだ？

「これを吹いたんだよ」

「……………」

言葉を失った。

当たり前だろ。

楽器なんだから、演奏するものだろ。

「そんなの当たり前……って、演奏して戦う？」

当たり前なんだが、それと戦うっていう事が一致しない。

演奏して戦うってどういう事なんだ？

キヨカは、ふっふ〜んと自慢そうにしている。

「これが私なりの戦い方なんだよ」

よくわからない。

「次の機会には、その目にしっかりと焼き付けてもらうからね」

「楽しみにしとくよ」

本当に楽しみだ。どう戦うんだ？

「とにかく、私の大活躍で、トールちゃんが寝てる間に、私とアーちゃんて封印したんだよ」

「そっか……」

今回は、全くの役立たずだったんだよな。

「お疲れ様」

「……およっ？ なんだか、調子が狂うよ」

「なんだよ。褒めたらこれだよ」

なんだか褒め損だ。

「ううん、そんな事ないよ。嬉しいよ。できれば、もっと褒めて。撫で撫でしていいよ」

頭を突き出してくる。

「そこまでしてやるつもりはない」

でもまあ、ちょっとくらいいかな……と思って、ぽんと頭に手を置く。

「照れちゃって……でへへ。嬉しいよ」

実際頑張ったみたいだから、今回はこれでいいだろう。

「そういや、お前が戦ったとかで忘れてたけど、これはそのせいだよな」

窓の外を見る。

「…………… そうだよな」

俺もキヨカも、この眩しさを目を覚ましたようなものだ。

この世界に来て初めて、俺たちは太陽の光を見ている。

「キッキさんたち、困ってないかな？」

「どうだろうな？」

なんとなく濁しておくが、本心ではわかっている。キヨカだって同じだろう。疑問として口にする事で、誤魔化そうとしているんだ。

キッキさんたちは、あの光のない世界が心地よかった。まさに理想の世界になったわけだ。

だけど、それと俺たちの役目は両立しない。俺たちは、その理想の世界を破壊しないといけなかったんだから。

そして、それが現実になっている。

もう、キッキさんたちの理想の世界はない。

窓から外を見ても、誰の姿もない。

もっと騒ぎになっているかと思ったけど、そうでもないようだ。

もしかして、あの時の記憶がなかったり、改竄がされているんじゃないかと思ったけど、それは違ったようだ。理由は、キッキさんとゴーウォンさんが部屋に来てわかった。

「ご無事でなによりです」

部屋に入ってくるなり、ゴーウォンさんが安堵の顔をする。俺はどのような状況だったんだろう？ それくらい、心配を掛ける状態だったって事だよな。

「本当に、お二人ともよかったです」

キッキさんも胸を撫で下ろす。

「その節は、お世話になりました」

キヨカが深々と頭を下げる。

「ほら、トールちゃんも。いっぱいお世話になったんだよ」

そう言って、頭を押さえつけられる。

「わかってるよ」

俺もお礼を言いながら頭を下げる。

「いえいえ、我々は特に……。しかし、この状況はどうしたというのでしょうか」

ゴーウォンさんが外を見る。

「今まで昇らなかった太陽が、再び昇り始めてしまいました。我々の理想だった世界は、終わってしまったのでしょうか」

真っ直ぐな瞳で見られると、直視できずに逸らしてしまう。

「あの……えっと……」

どう説明したものか迷ってキヨカを見るが、キヨカは完全に俺に任せるような顔で見ていた。

ちくしょう。どうせ、こういう役回りだろうよ。

「えっとですね。結論から言うと、世界は正常だった頃に戻りました」

「正常……」

キッキさんが呟く。

確かに正常に戻った。しかし、これはキッキさんたちにすれば、不自然で暮らしにくい世界なんだ。

「正常に、です」

だけど、ここで怯むわけにはいかない。もう一度、言葉にする。

「そうですね。あれは異常な事だったんですよ」

残念そうな、なにかとても大切なものを失ったようだった。

そりゃ、理想だった世界が実現して、それが消失したんだもんな。世界の消失——これほど大きなものはないだろう。

「すみません。俺たちは、こうする事が旅の目的なんです。異常が起こっている世界を、元の姿に戻す。そうしながら、旅をしているんです」

自分で言っていて、なんとも荒唐無稽(こうとうむけい)だな……と思う。

でも、こうして改めて口にしてみると、俺たちってとんでもない事をしてるんだな。

世界の改変みたいなもんだろ。

世界を救うヒーローなのか。……まあ、ヒーローかどうかは別問題だな。なにせ、このせいで迷惑を被(こうむ)る人たちもいるわけだし。

自己満足ヒーローかな。

「あなたたちを、国内に招かなければよかったー」

鋭い言葉が刺さる。

本音であり真実だ。

確かに、俺たちを国内に入れなければ、こうなる事はなかったかもしれない。

いや、それでも俺たちはなんとかしただろうけど。

少なくとも、自分たちで破滅を導いたという事はないだろう。

「——そのくらいの恨み言は、赦されるのでしょうか」

しかし、キッキさんの表情は穏やかだった。

「そうですか。スッキリしました」

ゴーウォンさんも、穏やかな表情になる。

二人とも、つかえていたものが取れたみたいだ。

「突然、こういう状況になってしまい、国中はパニックになっていました。突然、理想の世界が終わったわけですからね」

静かだから、なにもないかと思っていたけど、やっぱりパニックになってたんだ。

「ですが、お二人の話で納得できました。我々は、自らこの世界の終焉(しゅうえん)を招き入れていたというわけですね」

世界の終焉か……。

俺たちは、そんな大袈裟な存在になっちゃうのか。

だけど、事実そうだよな。

俺たちは、この世界を終わらせたんだ。

その重みを感じたのか、ずっと黙っていたキヨカが口を開く。

「ごめんなさい。ずっと迷ってたんです。でも、やっぱりこのままにはできなかった」

言い訳になっちゃいますけど……と続ける。

言い訳なんて認められるわけではない。だけど、キヨカも俺も言わずにはいられない。

「いえ、いいんです。こうなる運命だったのでしょうか」

「そして、あなたたちを殺しても、元の世界は戻ってこない。違いますか」

ゴーウォンさんの視線が怖い。この人、本気でやりそうだぞ。武器は持ってないみたいだけど、どこかに隠してたりしないだろうな。

警戒はするが、あいにくとこっちに武器はない。とにかく、逃げる事を考えるべきかな。

「そ、そうですね。もう済んだ事です」

緊張して声が震える。

「ならば、我々は前のように生活するだけです。元の生活が戻ってきただけですから」

そう言って自分たちを納得させるしかないんだ。

便利になった生活を捨てて、再び不便な生活に戻る。そんな事ができるんだろうか。俺には想

像だにできない。絶対に無理だ。俺自身の事なら、そう断言できる。

それなのに、そう言わせたという事は、この人たちは、達観している……わけでもないだろうな。きっと、諦めてしまっているんだ。

これは達観じゃなくて絶望だ。

「トールちゃん、大丈夫かな？」

キヨカもそんな雰囲気を感じたんだろう。

「どうだろうな」

絶望に包まれたこの国が、どういう道を進むのかわからない。

絶望を受け入れるのか、それとも絶望に押しつぶされて滅ぶのか。

俺たちにはどうする事もできない。

俺たちは、ただこの国をかき乱しただけだ。

恩を仇で返すってやつだろうな。

その程度には、俺たちはこの国にとっての悪だ。

もしかすると、この世界を光のない世界にした蟲(ベステート)こそが、神様だったのかもしれない。

信仰なんてそんなもんだろ。

自分にとって都合がいいものが善で、不都合なものが悪だ。全てにおいて、そういうものだろう。

「キヨカ、俺たち、これ以上この世界にいていいのかな」

「いなくなった方がいいのかもね。っていうか、逃げるべき？」

同じ気持ちだな、やっぱり。

この世界にとっては善だったとしても、この国に限れば俺たちは災厄でしかない。これ以上は、ここにいないべきじゃない。

この人たちの心情を考えてもそうだけど、それよりも俺たちの身の安全だ。

俺たちのせいだと広まれば、俺たちに危害を加えようとする人たちだっているだろう。きっと、殺せば元に戻るなんて、そう考える人だっているだろう。

そんな言葉に煽られた国民は、暴徒と化す。

その人たちを相手に、俺たちはなにもできない。ただ逃げるだけだ。

「「キッキさん、ゴーウォンさん、お世話になりました」」

唐突だった俺たちの言葉に、二人は驚く。

「どうされたのですか」

「俺たちは、この国を出ます。お世話になりました」

「もう少し、ゆっくりされても……」

「私たちの役目は終わりましたから」

逃げるんだという事を悟られるわけにはいかない。だけど、この人たちが俺たちを帰すつもりがあるのか、それだけでも見極めないと。もし帰すつもりがないなら、強行突破しかなくなってしまう。

「しかし、まだ疲れが癒えていないのでは」

「大丈夫です」

引き留めようとするゴーウォンさんの言葉を振り払う。

どうやら、帰すつもりはないみたいだな。

荷物はそれほど広げていない。しかし、その荷物は、キッキさんとゴーウォンさんの向こうにある。

「キヨカ」

「うん」

俺たちはタイミングを確認。そして、一気に荷物へ。

「「っ！」」

しかし、それはゴーウォンさんに防がれてしまう。

「もう少し、ここにいていただきます。事情がわかりましたので、それを国民に説明しなければなりませんので」

「くっ……」

どうやら、なんとしても俺たちをこの国から出さないつもりらしい。

そりゃそうか。真実は俺たちしか知らない。

ゴーウォンさんの言葉通りなら、説明役には必要だろう。

だけど、そんな都合のいい考えはできないんだな、これが。

最終的には、俺たちは処刑されるかもしれない。

俺たちを殺せ。

そういう展開になるだろう。

そのくらいの想像はできる。

「トールちゃん、強行突破だね」

普通に国を出ていきたかったけど、どうやらそれは叶わないらしい。強制的にこの世界を出るしかなさそうだ。

「そうなるな。キヨカ、準備はいいか？」

「もうちょっと待って」

キヨカはその能力(ちから)を発動させて、『時の口』を作り出す。

これは二人には見えていないはずだ。

自分たちしか見えないって言われても、他の人の見ているものが見えるわけじゃないもん。あまり実感はない。

だけど、こんなに近くで作ってるのに気付かれていないって事は、本当に見えてないんだらう。

。

「いいよ」

どうやら準備はできたらしい。

一度俺たちが荷物を取ろうとしたので、二人は明らかに警戒している。

ゴーウォンさんは、そこそ腕が立つ。キッキさんも、素人というわけでもなさそうだ。

こりゃ、厳しいかな……。

まあ、だからこそ『時の口』はあの場所なんだけど。

「いくぞ」

「うん」

俺たちは、再びタイミングを合わせる。

今度は怯まない。強引にでも突っ切る。

「ごめんなさい」

「すみません」

俺たちは謝りながら、ぶつかっていく。

構えていた二人も、思わずよろけてしまう。それがチャンスだ。

そのまま、一気に荷物を手に取る。そして、荷物の近くに作ってあった『時の口』に入る。入るっていうよりも、そのままの勢いで飛び込んだって感じかな。飛び込む途中で、荷物を取ったって感じの方が正確かも。

「お世話になりました」

「ご飯、とっても美味しかったです」

その言葉を残して、俺たちはこの世界を後にした。

「消えた……」

「お二人はどこに？」

残されたゴーウォンとキッキは、目の前の光景に唖然としていた。

国民の前で説明させ、そのまま責任をとらせようと、拘束するつもりだった。

あの理想の世界が終わってしまったいじょう、なにかしらのケジメが必要だった。

それには、旅人が最適だったのだ。

自国民を犠牲にする事はできない。だが、旅人ならば問題はない。国内での事故――それで片付けられる。

「どうする？」

「消えてしまったものは、どうしようもないじゃない」

予想外の事に困惑するしかない。

「どう報告すればいいんだ？」

「ありのまま……は信じてもらえないでしょうね」

目の前で人が消えたなど、誰が信じるだろうか。いや、あの二人の場合なら、信じてもらえるかもしれない。そんな考えも浮かぶが、とても報告できる内容ではない。

「これからが大変ね」

世界が戻った事もそうだが、事後処理に追われてしまうだろう。

「あの二人を入国させた事も、問題視されるだろうな」

「でしょうね」

この先、どういう処分が下されるのか、想像できない。

「エスネたちが羨ましいわ」

「あの旅人たちは、特に問題がなかったからか？」

「それ以外にある？」

「いや。同感だ」

「どうしたらいいのよ……」

キッキは頭を抱えて座り込む。

「解任だろうな」

「それで済めばいいけどね」

「想像したくもない」

「しちゃうでしょ」

世界に光は戻ったが、二人の先に光は見えてこない。

理想の世界

F i n o .

心の歌を奏でて 一理想の国一 ㊦

<http://p.booklog.jp/book/88166>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88166>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88166>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ